ISBN978-4-00-027117-2
C3380 ¥3400E
9784000271172
定価（本体 3400 円＋税）
1923380034009

シリーズ方言学 1

方言の形成

小林 隆
木部暢子
高橋顕志
安部清哉
熊谷康雄

岩波書店

シリーズ方言学 1

方言の形成

小林 隆
木部暢子
高橋顕志
安部清哉
熊谷康雄

岩波書店

方言はどのようにして生まれたのか

——基本課題を整理し、斬新な発想で挑む

定価（本体 3400 円＋税）

シリーズ方言学（全 4 巻）

第 1 巻　方言の形成
小林隆・木部暢子・高橋顕志・安部清哉・熊谷康雄［著］

第 2 巻　方言の文法
佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂［著］

第 3 巻　方言の機能
真田信治・陣内正敬・井上史雄・日高貢一郎・大野眞男［著］

第 4 巻　方言学の技法
小西いずみ・三井はるみ・井上文子・岸江信介・大西拓一郎・半沢康［著］

〈編者紹介〉

小林　隆（方言形成論への誘い）
東北大学大学院文学研究科教授

〈各章執筆者紹介〉

小林　隆（第1章）

木部暢子（第2章）
鹿児島大学法文学部教授

高橋顕志（第3章）
群馬県立女子大学文学部教授

安部清哉（第4章）
学習院大学文学部教授

熊谷康雄（第5章）
国立国語研究所情報資料部門部門長

シリーズ方言学1
方言の形成

2008年3月27日　第1刷発行

著者　小林隆（こばやしたかし）　木部暢子（きべのぶこ）　高橋顕志（たかはしけんじ）
安部清哉（あべせいや）　熊谷康雄（くまがいやすお）

発行者　山口昭男

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電話案内 03-5210-4000
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・三陽社　カバー印刷・NPC　製本・松岳社

© Takashi Kobayashi, Nobuko Kibe,
Kenzi Takahashi, Seiya Abe
and Yasuo Kumagai 2008
ISBN 978-4-00-027117-2　Printed in Japan

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写は，著作権法上での例外を除き，禁じられています．本書からの複写は，日本複写権センター（03-3401-2382）の許諾を得て下さい．

第4章　アジアの中の日本語方言

4.1　アジアの言語を「地域差」「方言」から見る研究

(a)　はじめに——日本語の「方言」をアジアの方言の中で見ることの意義

本章のテーマは「アジアの中の日本語方言」である．「方言」を単位としたアジアとの比較という観点は，これまでの「近隣言語と日本語との比較」とは異なる．「アジアの言語と方言」の中で「日本語方言」を見ることの意義と課題について考えてみたい．

アジアの（言語の）中の「日本語」を，1言語単位で相互の歴史的関連性の観点から比較するのであれば，比較言語学での系統論研究になろう．また，「世界の言語の中の日本語」という視点から，他言語との類似性・共通性などを比較するのであれば，対照言語学や類型論による研究となる．いずれの観点でも（後掲する一部の試みを別にすれば），「日本語」がもつ地域差である「方言」は考慮されないことが多い．一方，「アジアの中の日本語方言」という視点は，従来のような地域差を捨象した，文化的中央での「日本語」ではなく，日本とアジアの方言を単位とし，それぞれの諸方言の比較・対照という問題を，その理論と方法に組み入れる研究である．

ところで，言語研究にとっての「アジア」とはどのような範囲であろうか．「アジアの言語」の範囲は，さまざまな設定が可能であろう．例えば，文字通り地理学的にアジアと呼ばれている範囲，漢字文化圏であった範囲，歴史的文化的に日本語と交流があった範囲，または，系統論的に関連が推定されてきた言語の範囲，などである．この範囲については，次項で具体的に「モンスーン・アジア」という領域を提示していくことにする．

なお本章で取り上げる具体的言語事象は主に音韻と語彙が中心となり，文法はまだ多くない．それは，一つには日本語方言の全国的規模での文法研究が，

『方言文法全国地図』(以下，GAJ)6巻の完結によって本格的に始まったばかりであり，歴史的研究の蓄積がまだ十分でない段階であるということがある．いま一つは，文法事象の場合，語彙・音韻に比較して，現象の変化が急激に体系的・全体的に進行しやすいため，個々の現象の新旧の判断や歴史的位置付けが必ずしも容易でないという問題があるからである．それが特に言語間での比較・対照研究という次元を問題とする場合，語彙・音韻よりも慎重にしなければならない側面をもっていると考えるからである．そのような言語史上における「文法」の問題に対する評価は，筆者一人のものではなく，次の言語研究者の言葉にも端的に現れている．

> 系統論にもちこむと危険なことがおこりかねない問題があります．語順が似ているとか，冠詞がないとか，男女中のような文法性があるかないかなどは歴史的に変化しうる性質のものですから，それらを系統と関係づけるには，よほど慎重でなければなりません．(竹内 2001，下線引用者)

(b)　日本語方言の基層としての「モンスーン・アジア」

日本語方言と比較・対照する「アジア」の範囲として，論の展開を単純化させるために，「モンスーン・アジア」という領域を提示するところから始めてみたい．「アジア」の範囲は，上記のようにいろいろに考えることができる．また，従来の系統論的研究でも，アルタイ語からオーストロネシア語，中国語，ドラヴィダ語まで，アジア・環太平洋の言語が比較の対象となってきている．しかし，ここに挙げる「モンスーン・アジア」という領域は，日本語にもある言語現象が分布する範囲であり，日本語の基層的背景として，現時点で最も比較・対照する必要がある地域と考えられる．

「モンスーン・アジア」(Monsoon Asia，以下，MA と略記)として提示するのは図 4.1 の領域である．この領域の設定は，方言の言語地理学的研究の過程で，河川名および類別詞の分布，さらに気候区分と文化人類学的現象などの関連性から見出したものである．本章は，MA の設定そのものを検討するのがテーマではないので，この領域についての詳細は拙論(安部 2003.7，Abe 2003.7，2006 など)に譲り[1]，以下に地域的特徴がわかりやすい事例を優先して簡略に紹介する．

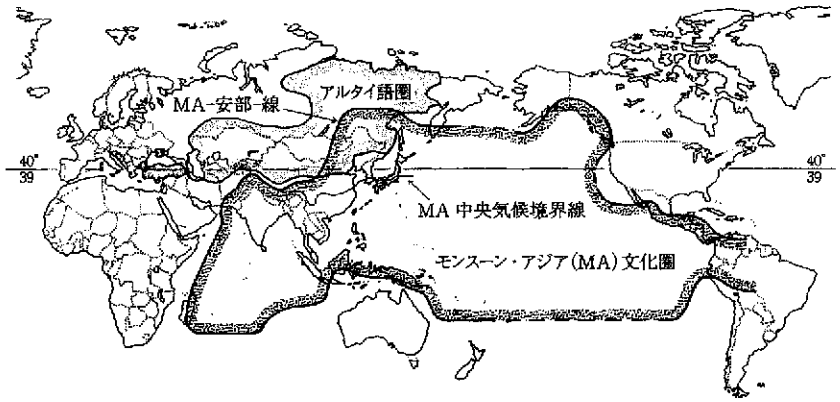


図 4.1　モンスーン・アジア(MA)の領域(安部 2003.7)
(アルタイ語圏と重複する領域に注意)

この領域には，まず，日本語にもその特徴が認められる類別詞(数量類別詞，numeral classifier)の共通した分布がある(図 4.2)．この範囲の外にはほとんど認められないという地域特有の特徴ということができる．

また，この領域内部には同源と推定可能な河川名(ナイ，ヌマ，サワなど複数)の分布が指摘できる(安部 2004.7，あべ 2004.12，安部 2005.5，Abe 2006，安部 2007.3c)．さらに，言語そのものからは離れるが，この領域は，神話学で東洋に特徴的とされる類型的な 10 種類の神話が分布する範囲と概略一致す

1)　MA を，言語研究の対象範囲として設定したプロセスを簡単に説明しておく．日本語の方言分布のパタンや分布境界線を分析すると，気候や気候の影響を受けた地形などの外的要因との地理的相関性が極めて強いことが認められる．河川名分布も方言分布や気候との地理的相関性が強い．その傾向は，日本語方言だけでなく，中国語，朝鮮語の方言分布でも認められた．そのような言語・方言と気候条件との強い相関性から，さらに広範囲で気候条件が共通する範囲をアジア周辺に探したところ，モンスーン・アジア気候というこの領域が見出せた．この MA には予想通り，河川名ほかの同源単語だけでなく，言語に関わる類別詞や神話の類型分布でも共通する分布領域が確認できた．さらに，文化人類学的現象でも多くの共通性が指摘できる特徴的文化圏と設定できた．安部(2003.7)の 12 項目以外の文化人類学的追加項目は次の通り(安部 2006.3 ほか参照)，⑬東洋における神話の類型的分布領域全 10 図(Frobenius 1938)，⑭MA 海域におけるタカラガイ類の分布領域，⑮霊長類のある種のウイルスの分布，⑯旧世界猿と類人猿のユーラシアにおける分布地域，⑰犬を食用とする習慣が(現在・過去に)ある地域，⑱ある種の蛙の分布地域，⑲原数の分布における「4 の優勢」(Frobenius 1929)．

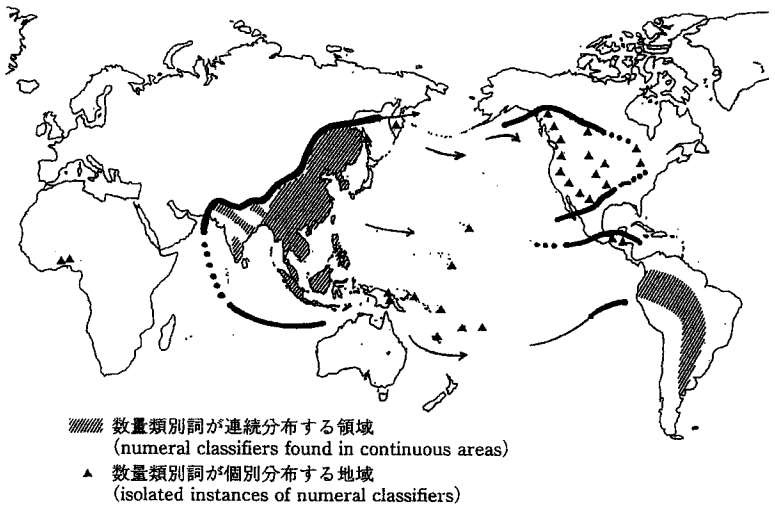
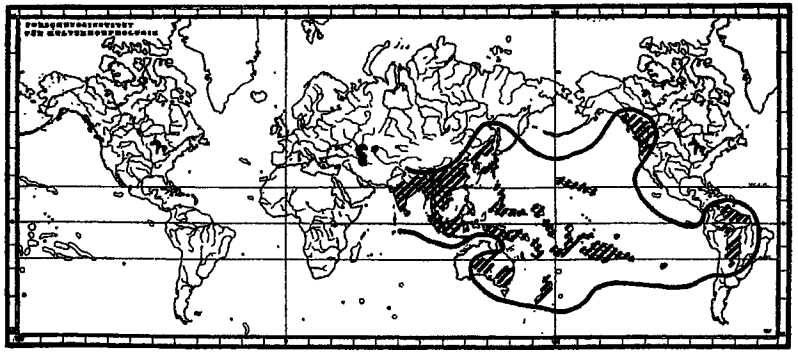


図 4.2　類別詞(数量類別詞)の分布領域(Aikhenvald 2000: map 3. Distribution of numeral classifiers in the languages of the world を太平洋中心に Abe 2006 にて改編)[2)]

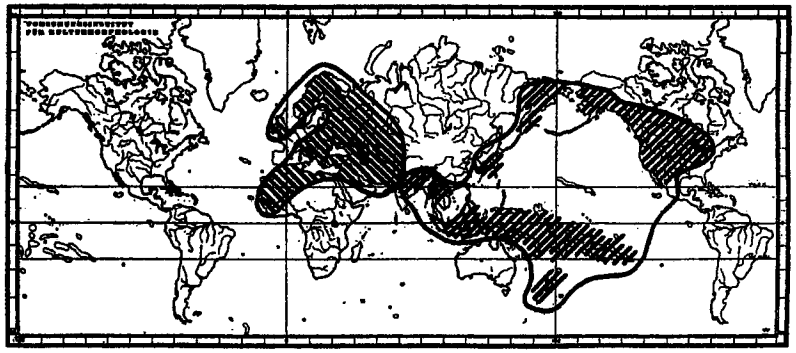
る(図 4.3 は東西 20 図の中の東洋型の 10 図のうちの二つで，一つは西洋の「焼いた鉄」にまつわる神話・伝承の範囲に対する東洋の「焼いた石」が登場する領域，もう一つは東洋の「花からの誕生」の類話の領域を示す．Frobenius 1938，あべ 2004. 12)[3)]．神話の伝播は，言葉の媒介なしにはあり得ない現象であるから，言語上の交流が(言語の種類の相違を超えて)あった領域と考えられる．また，共通神話を受容しかつ保持するには，何らかの共通文化

2)　原図には該当するはずの日本に斜線がないが，アイヘンヴァルト女史の直話では「見落としかもしれないので確認してみたい」とのことであった(2003 年プラハ・国際言語学会の懇親会にて名刺交換時)．なお西光・水口(2004)の西光氏の注 1 も参照．

3)　Frobenius(1938)の東洋における神話の類型的分布領域全 10 図参照．フロベニウスは，世界神話での西洋型と東洋型という典型的東西分布を指摘する．東洋型の分布範囲は類別詞や MA と極めてよく一致する．気候と文化が共通した範囲に同質の神話が受容されやすかった可能性が指摘できる．データの古さなどの問題点はあべ(2004. 12)参照．10 の類型は地図タイトルのみ示すと「1. 英雄が母の死後生まれる」「2. 矢の梯子」「3. 柱の悪戯小僧」「4. 海の怪物に呑み込まれた英雄」「5. 太陽の子」「6. 花からの誕生」「7. 死体からの作物発生」「8. 木彫りからの魚(及び鯛)の発生」「9. 釣られた少女」「10. 焼石」．



(第 6 図)花からの誕生(Blütenursprung)の神話分布



(第 20 図)西洋の焼いた鉄(Polyphemtod)▧，東洋の焼いた石(Glutsteintod)▨の神話分布

図 4.3　神話の類型的分布における東洋型と西洋型(Frobenius 1938)

や共有する意識の存在が考えられる．例えば，分布が共通するタロイモ・ヤムイモなどの芋栽培文化(安部 2003. 7 の地図参照)は「地下茎による根菜増殖」という食料栽培・獲得方法を共有するが，それは「埋めた身体からの作物発生神話」という食物誕生神話(Frobenius 1938 や大林 1999 等参照)を共有できる基盤となる．このように言語交流と神話と動植物分布には広義の文化的関連性が認められる．

さらに，間接的な理由として挙げれば，言語特徴と神話共有を理由付けるような多くの文化人類学的共通現象も，ほぼこの領域(特に大陸部)に認められる(安部 2003. 7，あべ 2004. 12，Abe 2006，安部 2007. 3a)．これらは単なる偶然

でなく，気候の共通性ゆえに多くの自然現象が共通し，それら共通自然現象があるゆえに多くの文化的共有現象が形成されてきた地域(上述の，芋と神話と栽培・獲得法のような「技術」との関連のように)と解釈される．

この領域の文化地理学的特質は，本質的には，類別詞の範囲として特徴付けられるのではなく，基盤としては気候学的共通性によって形成されたといえよう．「モンスーン」が支配的であるので，いわば「モンスーン・アジア文化圏」として規定可能となる(あべ 2004. 12 参照)．この領域を，最も古い日本語の基盤として提示し，日本語方言と比較することは，日本語史研究のみならず言語系統論上も言語類型論上も，有意義と考えられる．なぜなら，この二つの研究分野においても，ほぼ同じ領域が問題視されてきているからである．

まず言語系統論上，従来同系候補として取り上げられてきた言語は，ほぼこの領域の言語である(図 4.1 の南北アメリカの言語のみが該当外)．北方ではアルタイ語でも特に東のツングース語，また朝鮮語，南ではオーストロネシア語，南東・南西ではオーストロ・アジア語，時代的に主に後代の影響として扱われる中国語，さらに諸説あるドラヴィダ語が含まれている．次に，最新の類型論の進展からは，日本語の特徴との類似性が高い領域として，「アジア・環太平洋」という領域が取り上げられるようになっている(例えば，松本 2006 が提唱する範囲)．MA は，類型論で注目されている「アジア・環太平洋」とも重複するようになった．

このように，系統論，類型論から見てもこの MA は注目される領域といえる．理論や方法の異なるいくつかの研究間で，日本語と比較される言語領域が近年特に近似したのは，日本語の長期的歴史的基盤として重要な特徴をもつと見なされていることを意味する．

(c)　アジア・環太平洋の中で比較する日本語方言

提示した MA の領域は，面的連続をもつ広範囲に及ぶ．比較・対照すべき範囲を連続する領域として設定することは，日本語方言の位置付け方にも影響する．なぜなら，例えば，日本語やその方言の特徴をアジアの言語と比較するとき，これまでのように，どれか 1 言語のみとの比較だけでは相対的な位置付けができないことになり，アジアのさまざまな方言との比較も必要になるから

である．

例えば，系統論的研究を例とすれば，上記の比較領域設定によって，従来の多くの研究のように，日本語と朝鮮語の比較という一対一の取り上げ方だけでは不十分となる．常にこの領域内の他の言語とも比較していくことが必要になる(安部 2005. 5)．今後 MA 内の他の言語での有無をも必ず比較参照することが必要となる．比較すべき言語の範囲をどのようにとらえていくかということそれ自体が，研究の方法や立場，具体的言語現象の解釈に重要な意味をもつことになる．「日本語方言と比較・参照するアジアの範囲をどのようにとらえるか」という観点そのものが重要な意味をもってくる．この点について，具体例を 1 点挙げておこう．

語彙の事例で，「酸っぱい」ことを表す日本語の方言分布には，スイ(西日本)，スッパイ(東日本の関東以南)，ス(ッ)カイ(東北，以下，スカイとする)の分布がある(『日本言語地図』(以下，LAJ と略記)，41 図参照)．これまでの系統論的研究であれば，この中から祖語形を 1 語認定し，それとの同源語形を近隣の 1 言語から探し出す(探せばよい)という方法がとられた．しかし今後は，MA 内の諸言語と比較するだけでなく，スイは中国語(影響の古い呉音や漢音)との比較，スカイは中国語やアルタイ語に見られる k・g をもつ語形([s〜k・g])との比較，スッパイは p・b—m 交替の可能性としてオーストロネシア語祖語形 *səm (sour，酸っぱい)との比較，インドの言語の探索など，各語形ごとに諸言語・諸方言との比較が必要となる．さらに，それらの分布と史的関係を総合的に解釈していく広い視点が必要になってくる(安部 2007. 3b)．

これらの相違は，次のように図示できる．

[これまでのアジア言語との比較]

スイ
スッパイ
スカイ
} ⇒ 祖語形 1 語形の仮設 ⇔ 近隣言語との一対一比較

［これからの比較］

スイ
スッパイ
スカイ
⇒ 国内の地理的分布の解釈 ⇔ MA領域の諸言語・方言と各語形ごとの比較
↓
それらの地理的分布の解釈と歴史的解釈

このようにMAの中に日本語方言を位置付けることは，従来の研究方法とは異なる方法を要求する．それによって1言語単位での比較という固定観念（パラダイム）の束縛から放たれ，アジア諸方言の地理的連続性も新たに検討可能となる．次にそのような異言語方言間の横断的比較を取り上げてみよう．

(d)　日本語の方言分布パタンとMAの方言分布パタン

「方言を単位として面的に比較・対照する」意味について具体例で見てみたい．MAから取り上げるのは，日本語と朝鮮語と中国語との間に横たわっている一続きの方言境界線である（図4.4，安部2007.3d）．このアジアの三つの言語分布の中央に横たわる方言境界線の成立には，後述するように気候上共通する要因が認められる．それゆえ，この方言境界線は3地域各々個別の現象ではなく3言語に横断的に関わる一つの言語現象を示すと解釈される．その史的解釈は日本語方言の形成過程にも関わり，かつ，アジアの方言分布の解釈とも関連してくる．この一続きのアジアの方言境界線に含まれていることを視野に入れて日本語方言を見ると，従来の日本語の方言区画論，方言分布パタン研究，言語地理学的解釈に見直しが必要になる．

日本語の方言分布には，図4.4の線の南北で方言が異なる「南北方言分布」がある．そこには「南北方言境界線（帯）」を認めることができる（安部1999.9参照）[4]．この分布パタンは，従来の「方言分布パタン」の研究では「南北分

4)　図4.4の日本列島内の境界線は，従来の研究で指摘されてきた南北方言に該当する代表的な4本の境界線（「しもやけ」「梟の鳴き声」「つむじ風」「手ぬぐいが凍る」の分布）と「ねまる」の境界線である．要因が気候であるため位置に多少の幅が生じているもので，一つの「境界帯」を成すと解釈される（安部1999.9）．

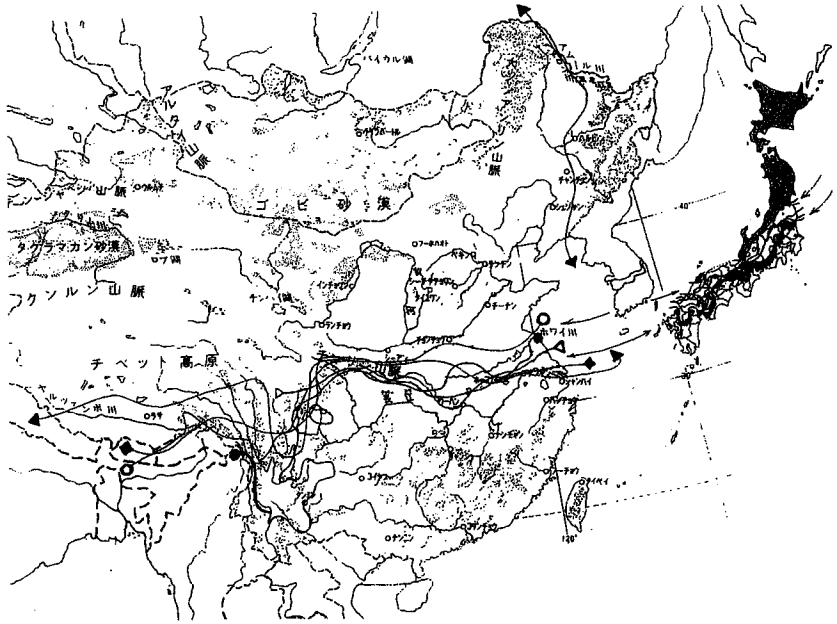


図4.4　モンスーン・アジア言語文化境界線（安部2007.3d）
中国「北―南」境界：▲河―江　△溝―渓　◆動物区画線（古北界―東洋界）　○摂氏0度等温線（最寒月1月）　●1000 mm/年間の等降水量線（いわゆる「秦嶺山脈―淮河―境界線」に相当）【日本・朝鮮半島は，南北方言境界線】

布型」（また太平洋対日本海型，表日本対裏日本型）と分類されたものである（安部1999.9）が，そのことは，日本語の「方言分布パタン」が図4.4のアジアの方言境界線の解釈とも関係することを表す．また，この境界線は，日本語の「方言区画論」（方言を地理的に区画し，各方言の歴史的分化関係を解明する研究）で問題となった区画線とも関係している（特に初期の東条操や都竹通年雄の区画案．安部2000.1）．

また，方言の分化系統論とも関わる．方言区画論では各方言が分化していく過程を樹形図式に示すが，従来は概略次の①か②の説を提示している．

①初め本土方言と琉球方言とに分化した→その後，東西方言に分化した
②東日本・西日本・琉球方言に三分化した
★③北方方言と南方方言とに二分化した→その後，再分化した

従来③のような本土方言の「南北分化」という視点は提示されていない．しかし，上記の中国語・朝鮮語にも見られる南北の方言境界線は，歴史的に見て，中国語では北京官話対南方(広東系)方言の境界線，朝鮮語では北部(高句麗)方言対南部(新羅・百済)方言の境界線という，各言語内の二大方言を区画する境界線と推定される(現在の中国南方諸方言はこの境界よりも南東側に縮小しているが，図4.4の河川名に古い分布の名残を確認できる)．それらでの南北二大方言は中国語・朝鮮語の史的方言分化において重要な二大分化と位置付けられる．この2言語での史的重要性から推して，日本語本土方言も，通説の東西方言の二分化よりも「南北方言分化」の方がより古い分化である蓋然性が高くなる．このことは，従来の方言区画論や方言分化系統樹の解釈(①②)に再検討を迫るものとなる．このように，図4.4のアジアの方言分布の中で日本語方言境界線を見ていくことは区画論や方言分化の解釈にも影響する．

それらの研究分野だけでなく，日本語の系統論には，北の言語であるアルタイ語基層説(上層説)や南の言語であるオーストロネシア語基層説(上層説)などもあるから，南北境界線での日本語方言の相違は，それら北方・南方の言語との関係でも問題となる．「日本語の方言をアジアの中で見る」ことは，系統論における南方・北方言語の影響や基層語問題にも新たな視点を提供する．

(e)　MAの言語・方言の中で日本語方言を考えていく意義

上記のように，系統論上は重視されていない中国語も含めたMAの中で日本語の地域差を検討することは，「方言学」「系統論」「類型論」「言語地理学」などでの従来の説に関わる課題を提示する．またさらに，次のような日本語方言とアジア言語史研究とに対して双方向に影響する課題を提供する．

「アジア言語の中で日本語方言の研究成果を検証すること」

「日本方言学の理論・方法をアジアの言語(方言)史研究へ応用すること」

「アジア言語史(歴史的地理的研究)に対して新しい視点を提示すること」

上記のアジアの南北方言境界線は，方言・言語だけでなく，文化現象全般に及んでいる(安部1999.9，2006.3)．このような東アジアにおける一続きの文化言語境界線は，従来まで言語学のみならず歴史学，考古学，民俗学，民族学，人類学，文化人類学でも知られていなかった．また，それを含むMAの領域

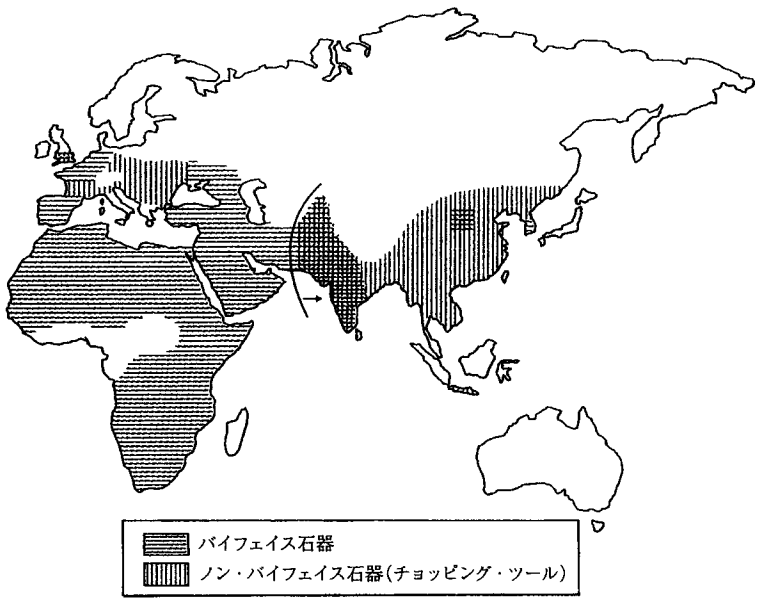


図4.5　旧石器時代の石器分布――東西分布および東洋の「非両面加工石器」の分布(ルーウィン2002)

でも，上記の言語学・神話学・気候学以外に，考古学，動物学，植物学，民俗学，民族学，文化人類学上の多くの現象が確認できる(安部2003.7，2005.6.11，2007.3a，図4.5に一例を考古学から示す)．従来のアジアより広いアジア・環太平洋広域地域における文化的共通性の指摘は，そのきっかけとなった日本語方言の言語地理学的研究が明らかにした成果である．「アジアの中の日本語方言」を考えることは，アジア・環太平洋の言語・文化研究全般に貢献することになる．

(f)　アジアの言語史研究・文化史研究への寄与

ところで，上で紹介した日本語の南北方言分布と境界線の存在そのものは，直接的には，日本語と，中国語・朝鮮語との系統論的同族関係を示してはいないことに注意されたい．同様に，各南北方言同士における何らの言語学的関係も直ちに意味していない．

(d)項で示した，日本語の「南方・北方方言の第1段階的分化」という新解釈は，中国語や朝鮮語における史的重要性に基づいた解釈の一つである．それは，日本語の区画論では重要視されなかった観点(南北分化)を，中国語・朝鮮語の「方言分布」との対照から新たに提示したものであった．これは，中国語方言・朝鮮語方言および日本語方言の問題を，アジアの中で比較する場合に，系統論・類型論以外の方法があることを示している(誤解なきように付言すれば，南北の一続きの境界線があることで，3言語の北方(あるいは南方)方言同士の直接の言語的関係を意味すると受け取る向きがあれば，それはこれまでの研究に縛られた誤解である)．このような研究は，方言分布の言語地理学的な類型論という意味で，「地理類型論的言語研究」(あるいは，方言類型的言語地理学)ともいえるかもしれない[5]．アジアの中で日本語方言を見ることは，アジアの方言分布パタン(区画・境界線)と比較することにもなる．それも21世紀のアジア言語研究の新しい課題といえよう．

4.2　アジアの言語・方言と日本語方言の比較——視点と方法

(a)　はじめに——従来の日本語方言の位置付け

第2節では「アジアの言語・方言と日本語方言の比較の視点と方法」について取り上げてみたい．はじめに，日本語方言をアジアの中で検討した従来の例を見ておく．

「日本語」そのものを，アジアなどの近隣言語や世界言語の中において考えることは，従来あまり行われてこなかった．方言を取り上げるように見える事例も，俚言・方言などの言語事象を，多くは「日本語」全体の言語特徴(あくまで中央語的な事象)と見なすことを前提としていた．それは，アジア言語史を取り上げる研究者が，日本語方言の専門ではなかったという事情もあり，また，系統論，類型論では日本語を地理的歴史的に単一のものとして扱うという前提がこれまで暗黙裡にあったという事情もあろう．そのような中で次の研究は，地域差の問題を積極的に解釈に取り入れているものとして評価される．

5)　橋本萬太郎(1978)『言語類型地理論』も，中国語，ヨーロッパ言語までは，方言単位で扱うが，日本語本土は「方言」単位で見なかったところに時代的制約があったと見られる．

小泉保(1998)『縄文語の発見』(第6章ほか参照)

馬淵和夫(1999)『古代日本語の姿』(p. 94の図ほか参照)

大野晋(2000)『日本語の形成』(第I部第1章参照)

これらに共通するのは，単純化すれば，東西方言を，縄文時代の基層的方言と，弥生時代以降の渡来文化の言語的影響による西日本方言の重層と見る解釈である．図式的には「縄文語対弥生語」という構図で東西方言なりABA分布を説明するもので，そこには，縄文・弥生時代という歴史年代を投影させた「歴史年代史観的構図」が認められる．

時期が近接するこれらの研究にこの傾向が顕著なのは，系統論研究において，1祖語からの分化ではなく，上層語・基層語という重層的形成が有力視されるようになったことが投影している(崎山1990，安部2002.5も参照)．そのような研究史を背景に，考古学などの文化現象を参考に「縄文—弥生」という歴史年代による解釈が多く現れることとなった．しかしそこでは，歴史年代による解釈が優先し，地域差が生じる他の可能性が十分に検討されていない傾向が認められる．方言分布からは既に縄文時代半ばには，関東を境界とするABA分布(後述)が生じている可能性が高く，単純な縄文—弥生という先入観は今後再検討していく必要が出てきている(安部2003.7)．

また別の問題として，方言を考慮した研究においても，日本語は地域差を考慮するが，近隣言語の「方言」は重視しない点も指摘できる．それは，類型論でも，中国語やオーストロネシア語など近隣語の地域差は考慮されても，日本語では方言が捨象されてしまう点と類似している．要するに一方向のみの方言の扱いを「双方向」的にし，これまで欠落していた「アジアの方言の中の日本語方言」という視点からとらえなおしていく必要がある．

(b)　比較の視点の相違——方言学と言語学

日本語方言の地域差を扱う場合，そこには大きく分けて異なる二つの立場がある．アジアの方言と比較する場合，その異なる双方の視点を理解しておく必要がある．

①方言的相違を日本語内部での独自の分化のみによる結果である，と解釈し研究する立場(内部分化観)——地域差の問題は日本語内部での独自の変化

による問題であると考え，外部の言語の影響は史的解釈からは除外して考える立場．他言語との比較は，あくまで対照言語学的研究，類型論(方言間での)的研究として扱う立場．

②それぞれの方言現象を，異なる言語との史的関連性や直接間接の影響関係の有無をも視野に入れて研究する立場．

②は，言語史研究，特に比較言語学的研究(系統論的研究)などでの視点である．①は，方言学，あるいは，旧来のいわゆる国語学的研究の視点といえよう．(類型論は，現時点では主に言語単位の比較で，かつ，歴史的解釈方法をそれ単独ではもたないので①といえるが，比較言語学や言語地理学の史的方法論から完全に独立した，独自の史的解釈の理論が今後加わるようになれば，②と同じ視点をもつことになろう[6]．)

大局的に見てこの①②の二つの視点の相違があり，それによって同じ日本語の方言現象でもおのずとその位置付けが異なってくる．考え方による解釈の相違を把握しておくことは当該研究上重要である．なぜなら，手続きや結果の客観性を相互に比較し相対的に位置付けることが可能となるからである．以下，具体例を簡単に見ておきたい．それは，これまでの同様の研究の相互比較でもあり，現時点では，多くの具体的考察よりもこのような理論上の議論の方が本テーマの理解にはより有意義であるからである．

語　彙

語彙は，これまでの系統論でもその地域差が問題になることが多かった言語事象である．

例(1)　河川名(タニ，ナイ)を例として．(日本語タニ(谷)は，新村(1916)以来朝鮮語との同源の蓋然性が高いとされてきた語である．また，ナイは古来アイヌ語ナイとの関係が問題とされてきた語である．)

6)　橋本(1978)で提唱された「言語類型地理論」は，類型論とはいえ，その史的解釈は言語地理学によっており，かつ，純粋に言語のみによる解釈というより東アジアの歴史学・考古学や民族移動なども積極的に組み込んだ複合的研究方法である．もっとも，印欧の比較言語学研究は，実際には民族移動・考古学研究などの関連研究成果をも積極的に参照して総合的に進められてきているのは自明のことである(ブナやサケの故地研究なども参照)．アジアの言語の研究ではまだその段階に至っていない(データがないためではなく)．また，日本(のアジア言語研究)ではその方面での言語史研究が欧米に比較して制約されたかたちで進展してきている事情がある．それらが，洋の東西での言語史研究の水準の相違と東洋側での史的研究の遅れを生んでいる1要因になっている．

①の立場——○朝鮮語と同源のタニについては，1外来語がたまたま地名として定着したと解釈する．○ナイは，その東北以北への地理的偏りを重視し，アイヌ語と一部の語彙を共有した段階の基層日本語の語彙として扱う．→これらでは，日本語内の地理的相違は，他の「言語」の影響を考えなくても解釈できることになる．

②の立場——○地名のタニの分布の偏り方(関東以南)から，それを持ち込んだ他言語の言語的影響の大きさと時期などを考慮する．○ナイとの同源語形を，西表島のナイや日本国内の他の地名だけでなく，朝鮮語・アルタイ語ほか近隣言語を広く調査し，東アジアにおける河川名分布として検討する．

例(2)　「糸」の方言分布(イト，ソ，カナ)を例として(LAJ 153・156図参照)．

①の立場——上代に例があり，分布も広いイトが最も古い日本語とされ，ソやカナは地方の一俚言とされて他言語とは比較されない(その祖語イトは，比較言語学的研究では，朝鮮語 sil との同源説がある(亀井 1954)．

②の立場——イトのほか，ソ，カナも他言語と比較され，地理的分布も問題となる．例えば，ソは中国語「苧」と同源語形か，「苧」の呉音が定着したものである蓋然性が高い．カナはアイヌ語のカやオカ，また，他の北方の言語と比較され，また，k—p 交替の可能性としてオーストロネシア語(例えば*p～n～，*b～n～のような語形)と比較され，古い段階でのアジア広域での同源語形の可能性も検討されることになる(安部 2007. 10)．また，言語地理学的観点からは，ソの分布と中国語の苧(苧麻)の分布の地理的共通性(「気候境界線」以南の分布)，また，カナの分布の地理的特徴(k音語形)も問題となる．

例(3)　「酸っぱい」の方言分布(スイ，スッパイ，スカイ)を例として(LAJ 41図参照)(安部 2002. 5，2007. 3b)．

①の立場——三つの語形の比較から一つの祖語を設定する(従来の解釈では，スイからの分化とされる)．

②の立場——3語形それぞれを近隣言語と比較して関連の有無や類似を検討する．また，3語形の地理的分布を，近隣言語での分布，また，方言音の

分布と比較検討することにもなる(安部 2007. 3b 参照).

音　韻

①の立場――方言における音韻の地域差を，文献国語史的歴史を中心に，周圏論的に解釈する.

②の立場――例えば，日本語方言の南北での音声的地理的相違を，アジアの方言分布とも比較して考察する(安部 2005. 5, 2007. 10).

アクセント

①の立場――方言アクセントの比較から，一つの祖語体系を理論的祖形として設定する．諸方言のアクセントは中古の京都アクセントから分化したと解釈されることになる．またその中でも，類型論的研究・対照言語学的研究としては，1言語のアクセント体系(高低アクセント)の中に，京阪アクセント，東京アクセント，二型アクセント，無型アクセントのような大きな相違を示す言語を世界的に検討する立場もあろう．また，そのような相違が，1500年間という比較的短期間に分化した言語を類型的に，また対照言語学的に検討することもできる．また，祖形アクセントから分化した方言は，日本語方言のように，文化的中心地から周圏論的にほぼ同心円状に分布するものかどうかを世界的に検討することも必要になる.

②の立場――諸方言アクセントの特徴と分布とを，近隣言語のアクセント・音韻と比較して，言語地理学的にも，言語類型論的にも検討する．京阪アクセント(あるいは，無型アクセント，二型アクセント)に類似する分布は，アジアにどのように分布し，それは系統論，言語地理学，言語類型地理論それぞれからはどのように解釈されるか(早田 1987 など参照).

文　法

(文法の方言分布の全容は，GAJ が完成する近年まで十分に把握されていなかった分野であるので，まだ歴史的傾向を全体的に考察できるまでの蓄積がない．今後に期待されるところが大きい分野である.)

①の立場――○動詞重複形の地理的偏在では，中央語での変遷の地理的残存としてのみ解釈する(安部 1997. 7)．○形容詞の活用が，関東以北では未発達で活用が完備しない傾向があるが(大西 1997)，それは関東以北の周辺地域で後代に生じた活用の崩壊としての無活用化という地域独自の変遷であるか，古代における形容詞活用形の未発達の名残と見なす.

②の立場――○動詞重複形のアジアでの用法と分布を，日本語方言の場合と比較対照する．○形容詞活用形の北関東以北の状態を，古代の形容詞活用形の未発達も参照しつつ，アイヌ語の影響や近隣言語の形容詞とも比較する.

これらの一例からもわかるように，その視点と立場によって解釈や位置付けは大きく異なってくる．これまではどちらかというと1方法1視点による検討に偏る傾向があり，日本語方言をアジア全体の中で相対的に検討するという段階には至っていなかった．それが近年次第に可能となったのは，次のような研究を取り巻く環境の進展があるからであろう．①言語史研究の理論的発展段階の影響(例えば，クリオール研究によって研究が進展したなど)，②日本語方言の諸資料，アジア言語の資料の蓄積，③研究者や研究水準の発展向上，④研究の学際化，⑤国家・国家間をめぐる問題の減少と国際情勢(グローバル化)，⑥アジアの言語・文化研究全般の発展とアジアの一体化，⑦日本の言語研究水準全体の世界的研究水準への上昇志向，などが複雑に影響し研究が進展してきているからでもある.

今後さまざまな観点や方法から，アジアも包摂した世界の言語・方言の地理的分布の中に日本語方言を位置付けていくのが，言語学としては理想的であろう[7].

(c)　比較方法――方言単位での地理的類型的研究

アジアの中で日本語方言を相対的に位置付けるためには，上記のいずれの立場にせよ，直接的言語関係の有無を判断する前に，まず関連現象を地理的類型的にも比較しておくことが重要になる．日本語内部での問題としてのみ見る前項の①の立場では，アジアの中で位置付ける視点そのものがないため，言語学としては問題となる当然のような言語事象も，比較自体が行われていないという研究上の陥穽がある．具体的な比較の上では，①MA の領域まで比較する言語を拡大すること，②方言単位に比較を細分化すること，③面的な連続性を

7)　安部(2006. 3)ではヨーロッパ言語の方言分布との比較を取り上げた.

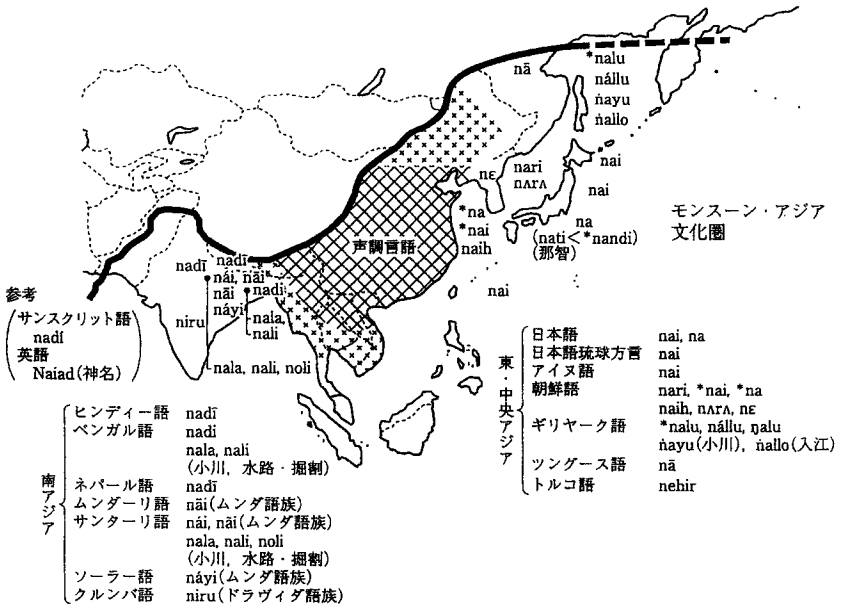


図 4.6　河川名ナイのモンスーン・アジアでの分布
(Abe 2006 にデータ追加して地図化)

重視すること，が重要で有効な方法となる．以下，その具体的な事例を，語彙，音韻，文法から取り上げてみる．

まず語彙の例として河川名を取り上げる(あべ 2004. 12，安部 2005. 5，2007. 3c)．河川名研究は欧米の言語学で既に史的観点から重要視されているテーマであるが，言語学が十分根を下ろしたにもかかわらず，アジアの中で検討することはほとんど行われてこなかった．日本語の河川名の地名分布として，ナイは東北に偏り，サワは東日本に偏り，同じくヌマは関東以北に偏る．これらの語形と同源の可能性が疑われる語形は，いずれも広く近隣語に認められる(これまでアイヌ語とのみ比較されたナイの分布を図 4.6 に示す)．ナイはかつてアイヌ語起源ともされた．しかし，日本の東北に色濃く残存するナイは(八重山諸島にも分布あり)，少なくとも朝鮮語を含むアルタイ語との同源性が高い．東西日本で使われるサワは村山七郎氏の指摘もあるようにオーストロネシア語

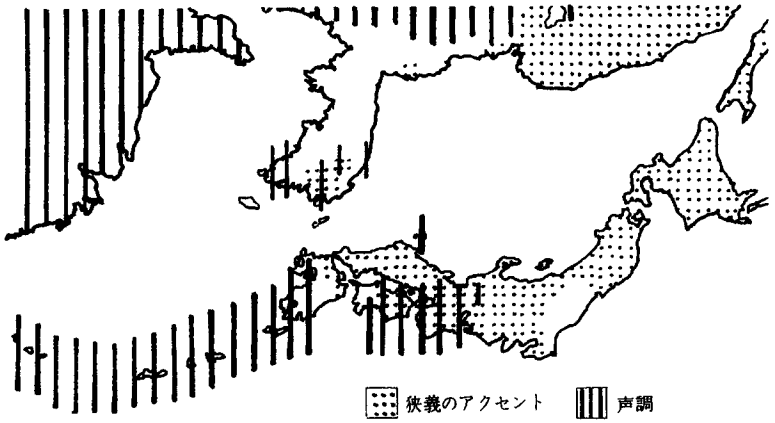


図 4.7　東アジアにおけるアクセントの南北分布(早田 1987)

と同源である蓋然性が高い(あべ 2004. 12)．ヌマは，アイヌ語・朝鮮語との同源と見られ，その他の近隣言語でも類似語形が少なくない．このように，近隣の一部の言語のみでなく MA 全域での検討が必要であることがわかる．

また，「糸」の語形では(LAJ 153 図「糸」，156 図「木綿糸」参照)，ソは中国語「苧」の呉音と同源と見られ，東北に分布するカナ(<*kan)はアイヌ語，さらに中国語の「経」(縦糸)，「弦」などと同源と目される．「すっぱい(酸)」では，スイの語幹は中国語「酸」，スカイの語幹は「酢」との同源の可能性が高い．またオーストロネシア語[*sem]との比較が必要となる(安部 2007. 3b)．従来，近隣の 1 語程度との比較に留まったが，それはアジアの広域を視野に入れていなかったためである．

次に音韻の問題としてアクセントを取り上げる．日本語方言の祖型アクセントとしては，中古京都アクセントが祖型に連なるものとして有力である．早田(1987)が，京阪アクセントを含む「声調的アクセント」の分布をアジアの中において位置付けるまで，そのアジアでの地理的分布を検討した研究はなく，早田論文はアジアのアクセント分布の研究が課題であることを突き付けた(図 4. 7 参照，早田 1992，1994 などの関連論文も参照)．「アジアの中の日本語方言」という視点が希薄であったことを象徴している．早田氏の示した 2 音節名詞以外の音節数や名詞以外の場合ではどのような位置付けができるのか．アジアで

相対化させる視点は，声調的アクセントのみならず他のアクセント型でも同様の問題を提示する．

無型アクセントをより古いとする意見もある．MAでの無型アクセントをまず見てみると，インド亜大陸でドラヴィダ語よりもさらに古い土着言語であるオーストロ・アジア語のムンダ語は無型アクセントである．興味深いことに，現在声調言語である中国語も，その声調(tone)が後代の発生であるという説が有力である(Matisoff 1973, 1998)．マティソフは，シナ・チベット語は，当初，子音と母音が整然と配列された，声調(tone)もピッチ(pitch)もない単一音調の音節言語であったとし，それが，後代に語頭または語末の子音の音韻対立の消滅の「代償」として声調の対立が生じたとする．ところで日本語のアクセント史研究でも，中古のアクセント資料において平板アクセントを示す語が極めて高い割合を占めることはつとに桜井(1975)によって指摘され，そのような無型アクセント的語が多く存在した理由も検討されている．あるいは，全体的体系として把握する立場からは，京都アクセント体系として位置付けられるが，一方，位相的相違や方言として古い特徴の一部が残存し，そのような平板アクセントの比率の高さに投影した可能性も疑われる．MAの領域の中心に声調言語があるが，その周囲に古い無型アクセントの周圏分布が確認できることになれば，早田氏の分布図や次に触れる九州南部から台湾以南に連なる末尾部卓立アクセント分布の検討も含め，MA領域のアクセント地図とその類型言語地理学による史的研究が今後の課題となってくることになる．

二型アクセントに関して見ると，台湾以南のオーストロネシア語のアクセントには，終わりから第2音節目にアクセントがくる言語，あるいは，その変化型として，終わりから第2音節目と第1音節目(つまり最後)の2箇所にアクセントがくる言語が，地理的連続をなして分布している．その特徴と地理的位置をアジアの中で地図化してみれば，日本語方言の鹿児島二型アクセントとの類型と地理的近接が見出せる．これは言語学でもほとんど触れられてこなかった．

次に文法から指示代名詞を取り上げる．指示代名詞は，日本語方言での地域差の報告はまだないが，アジアの中において見るとその地域差が問題となる(今後，日本語方言の地域的相違が研究課題となる)．日本語は，コ・ソ・アの近・対(中)・遠称の三分法をとる．世界の指示代名詞は，区別なしから，二分，

三分，四分，五分(以上)まで種々知られている．隣の朝鮮語は日本語に類似する三分法をとるが，朝鮮語の北部のツングース語・モンゴル語などのアルタイ語は二分法である．南方のオーストロネシア語では，現在は二分法もあるが基本的に三分法である．つまり，日本の隣では，北方二分法—南方三分法という対立をする(古代朝鮮語の南北差も課題となる)．興味深い点として，中間にある中国語が，現在二分法であるが，古くは三分法であった可能性を指摘できる．その古い指摘として，松下(1927)では，山東省の方言と漢文文語での三分法の指摘がある．小川(1981)は，中国・呉系蘇州方言における用法が三分法と解釈でき，それが古態を示すもので，オーストロネシア語と同様の三分法が原中国語に存在していた可能性を推定している．ところで，現在の中国語は，特に中国北方方言でアルタイ語の影響を受けている．松下と小川の指摘にその史的解釈を加えると，この二分法のアルタイ語の影響で，北方中国語(北京官話系)は三分法から現在の二分法に推移した可能性が指摘できる．その点で小川の三分法古態説は極めて興味深い．さらに，両氏の指摘する三分法が残存する方言はいずれも南方であり，北方の二分法の影響が少なかった地域である点も注意される．

仮に，原中国語が松下と小川の指摘のように三分法であったとすれば，日本語・朝鮮語・オーストロネシア語・中国語(南方方言に偏るか)が三分法であり，地理的に連続する共通性をもつことになる(中国南方方言のみの指摘であるから南方のみであった場合，東アジアの北方が二分法，南方が三分法であったことになり，「気候境界線」で「南三分法—北二分法」であった可能性も生じる)．一方で，これらの周囲には二分法が分布し，かつ，日本語も古く遡ると二分法が基本であった可能性もうかがえるから(コーカ(ア)系，および，コーソ系の2系統での対応は古い二分法の名残ととれる)，これらの言語地理学的解釈によっても歴史的には日本語祖語は二分法がもとで，後にアジア南方言語の影響で三分法に変化した可能性が指摘できることになる．

文法についてはほかに安部(2000. 12, 2003. 5)でアジアの接中辞の分布について触れたことがあるが，最後に松本(2006)が提唱する地域的問題を紹介しておく．松本氏は，類型論的に世界規模で多くの文法事象を取り上げているが，「アジア・環太平洋」地域に共通現象が多いことを指摘された．文法の類型か

ら指摘するその領域はMAの領域とも極めて近似してくることが注目される．

これらの事例のように，①MAの領域まで比較する言語を拡大すること，②方言単位に比較を細分化すること，③面的な連続性を重視すること，またさらに，④類型論的言語地理学的観点から検討すること，が有意義であることがわかる．

ヨーロッパの諸言語並みに日本語方言とアジア言語を研究していくためには，直接的言語の影響関係を判断する以前に，上記の種々の問題を検討する材料となる「アジア言語・方言地図」のようなものの作成が，21世紀の研究課題であろう．

(d)　比較のための地理的類型の視点

(c)項で取り上げた個々の現象では，相互の関連性や類似性とは無関係にアジアとの問題点を取り上げた．しかし，比較する日本語方言の現象も，アジアの諸方言との歴史的関係や構造的関係があるものを優先的に取り上げるとなれば，アジアとの地理的ないし歴史的関連性が，できるだけ多くの言語現象に共通して見られる類型的現象を取り上げることが，本章の観点からいえば優先されることになる．例えばかつて，糸魚川・浜名湖方言境界線(以下，糸・浜線)での東西方言は，西日本方言に渡来言語の影響が疑われ，大陸や半島部の言語と比較された．一定の分布パタンとの比較によって，アジアとの関係がより明らかにしやすくなるからである．糸・浜線以外の分布類型があれば，各々の地理的類型ごとにアジアとの比較が必要となる．そのためには，日本語方言の分布類型を，従来の方言区画論，全国分布パタン，方言境界線などにおける地理的研究を相互に比較参照しながら，分類整理しておく必要がある．以下まず，従来取り上げられてきたパタンについて概観し，次の第3節ではその一部について具体的に検討してみたい．

(1) 方言区画論

方言区画論における区画の仕方は，東条操氏の第1次案以降，多くの案が提示されている(紙幅の関係でそれらすべてを挙げるのは省略する)．一例として挙げておけば，金田一春彦第2次案における内輪・中輪・外輪・南西諸島方言の4区画(図4.8)は，次に挙げる全国方言分布パタン，方言境界線などにおける境界線とも特に一致してくるので注目される(安部1998.5.31)．方言区画案では，同時に地域間の史的分化も検討されているので，歴史的形成過程とも関わる問題をもつ．

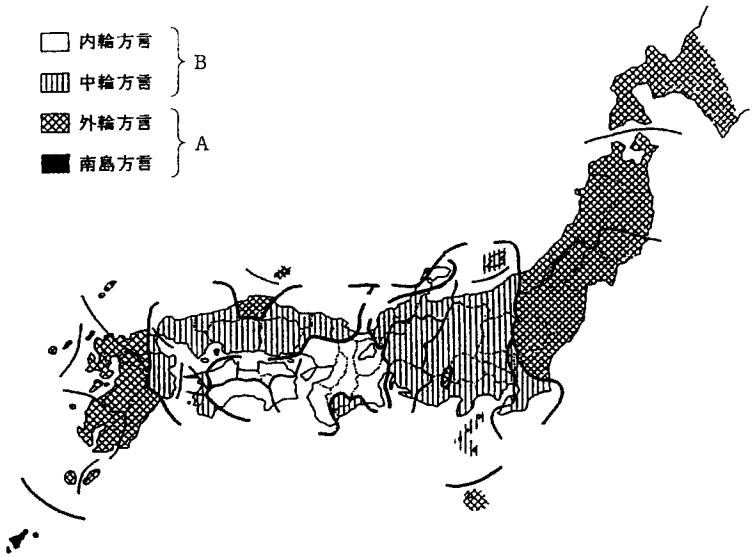


図4.8　方言区画案(金田一春彦第2次案)(金田一1964)

(2) 全国方言分布パタンの類型

全国方言分布の地理的パタンを類型化し，各特徴を考察する方法は，柴田(1962)で最初に示された．その後，井上(1977)，徳川(1981)，佐藤(1986)他でも，踏襲されつつ追加されて，現在，以下のようなものがある．安部(1991)では，「三周辺分布」(安部1997.3で「三辺境分布」から改称)を提示した．

ア　全国独占分布型

○AB分布型

イ　東西対立分布

ウ　南北対立分布(裏日本対表日本，太平洋対日本海)(安部1999.9参照)

エ　東北・非東北分布型

オ　南西・非南西分布型

○ABA 分布型

カ　同心円分布型(周圏論的分布)(さまざまなパタンがある)

キ　交互分布型(段だら模様型，ABABAB 型分布)

ク　三周辺分布型(ABABA 型分布)

○複雑分布型

ケ　群雄割拠型分布(中・小規模地域ごと分布型の類，ABCD 型分布)

コ　錯綜分布(極めて多種多様で複雑な類，例「つむじ風」)

これらは，それぞれ指摘されている特徴に関してアジアとの比較が課題となる．例えば，全国独占分布は重要度の高い基礎語彙に多く，基層語的特徴と見なされており，アジアの古い言語との比較が課題となる．ABA 分布は AB の新旧の観点からアジアの言語との関係が比較でき(後述)，また，南北分布はアジアの南北方言との関連を検討することが課題となる(後述)．

(3) 方言境界線の類型

方言区画論における区画(東西方言)や全国方言分布パタン(東西対立)とも関わるが，方言境界線(の束)から分布類型を見ていくという視点がある．国語調査委員会によって見出された糸・浜線のほか，徳川(1981)は，関東中央(利根川)や，中国地方中央を横切る境界線に注目していた．安部(1999. 5)では，それらも含めて新たに整理し，次のような方言境界線が研究課題であることを指摘した(安部 2003. 3 : p. 86 からカを追加し，いまキも追加する)．

ア　糸・浜線――東西対立の境界線

イ　気候境界線(南北境界線)――南北対立分布の境界線

ウ　奥東京湾境界線(関東―越後境界線，利根川―柏崎境界線)――金田一春彦氏の外輪方言と中輪方言の東側の境界線

エ　三関線(仮称)――内輪方言の境界線の一部

オ　西日本内での境界線(徳川 1981 も指摘する，中国地方中程を横切る分布)

カ　東北北部境界線(北緯 40 度付近の境界線)

キ　九州内部の境界線

例えば，ウは縄文中期まで遡及する可能性があるから(安部 2003. 7)，その南北での方言の相違はアジア方言との比較の上でも注目されるものとなる．

以上のような地理的類型が比較上有効であり優先的に検討される課題である．

(e)　アジアと関連する地理的類型

方言分布でも，日本語史とも強く関わる地理的類型や分布のパタンを優先的に取り上げていく方が，より類型性・普遍性・史的関連性のあるアジアの方言研究の問題を見出しやすい．(d)項で取り上げた複数の地理的類型の研究でも，特に次の分布パタンは共通して取り上げられており，それが重要であることがわかる．またそれらでは，アジアの方言・言語との地理的関連性も認められるから特に注目される．

①南北分布＝南北方言境界線による南北対立(→方言区画・分布パタン・境界線類型に関わる)

②ABA 分布＝関東―越後境界線による分布(その中でも，「外輪方言対「中輪＋内輪」方言地域」)(→方言区画・分布パタン・境界線類型)

③東西分布＝「糸・浜線」(→方言区画・分布パタン・境界線類型)

④「内輪＋薩南方言＋琉球」方言分布(→方言区画(金田一案の内輪方言地域ほか)・早田論文・分布パタン(「1 音節語長呼(音韻)＋ヨム(数える，語彙」など))

③④は，上述のようにこれまでもアジアとの比較が問題となっているので，以下では，紙幅の都合から①を中心に取り上げ，②での問題点も紹介していくことにする．

4.3 「南北方言境界線」と日本語方言の南北区画

(a)　日本語方言とアジアにおける南北方言境界線の諸相

「南北方言境界線」(図 4.4，以下簡略に「南北線」と呼ぶ)は，先に一部触れたようにアジアの言語にも連続する方言境界線がある．成立要因が同じ気候境界であるゆえに同様の方言境界線が中国語・朝鮮語にも存在する．その境界線(帯)を挟む南北で，後述のように，語族の相違を超えて音韻上の共通現象も確認できるから，言語学上も重要な境界線である(安部 2007. 10)．この南北線に関わる日本語とアジアの方言の問題を 1, 2 取り上げてみる．

まず，南北線に該当する日本語方言には以下の①～⑲のものがある(①～⑤安部 1999. 9(図 4. 4 の線)，⑥～⑩安部 2003. 3 科学研究費報告書，⑪～⑲は安部 2007. 3a などによる．①～⑰のリストは安部 2006. 3 にて報告済み)．従来の研究では，語彙に限定されていたが(安部 1999. 9)，複数の音韻現象と文法の一部にも見出せることがわかった．それゆえ，糸・浜線や，関東―越後の方言境界線(「奥東京湾境界線」)と並ぶ重要な境界線と位置付けられる(その重要性に注目することで新たに⑨⑩⑬⑯⑰などの重要な対立も見つけ出すことができた)．

①シモヤケ(LAJ 127 図「しもやけ(凍傷)」――柴田(1962)
②無回答・タツマキ(LAJ 264 図「つむじ風」)――真田(1989)
③ノリツケホーセー・ノリツケホーソー(LAJ 298・299 図「梟の鳴き声」)――佐藤(1986)
④シミル(LAJ 97 図「(手拭いが)凍る」)――加藤(1989)
⑤ネマル(LAJ 51 図「座る」，52 図「あぐら(胡座)をかく」)――安部(1989. 3，1999. 9)
⑥「『フキ(吹雪)』の言語地図」(迫野 1998 による安部 2003. 3)
⑦「『シバレル(凍)』の言語地図」(『日本方言大辞典』(以下，SDJD)より)
⑧「『アラマチ(荒町)』の地名分布」(鏡味 1985 による)
⑨「～ボイ(追い)」(bu―u 対応(ボウ―オウ)の言語地図――LAJ 189 図)
⑩「ボイ～(追い)」(bu―u 対応(ボウ―オウ)の言語地図――LAJ 147 図)
⑪地名分布「溜池を表す『～堤』」(鏡味 1984 による)
⑫「u<i(フガシ(東)・フゲ(髭)」の言語地図(複合図)(LAJ 11・12 図)
⑬地名分布「bu―u 対応(budo 葡萄―udo・uto 宇藤・宇都)」(鏡味 1958)
⑭「『おがる(生育)』の言語地図」(起く＝-aru 型動詞の残存)(SDJD)
⑮地名分布「カクマ」(囲ま・る＝-aru 型動詞の残存)(鏡味 1958)
⑯「『キツ―ヒツ(櫃)』の *kw―p 対応」(SDJD)
⑰「『酸っぱい』のスカイ―スッパイの *kw―p 対応」(LAJ 41 図)
⑱「セ・ゼの発音の喉音化(ヒェ・ヘ)する地域」(SDJD「音韻総覧」)
⑲「四つ仮名における一つ仮名地域」(SDJD「音韻総覧」)

アジアでのこの境界線を見ると(図 4. 4)，まず中国語では，河川名の「河―江」(大河川)，「溝―渓」(中規模河川)に確認できる(この 2 種の河川名境界の地理的一致も安部 2001. 8(→安部 2001. 11)が最初の指摘になる)．中国語方言の二大区分である北方官話方言と南方(広東系ほか)方言の境界も，古くは河川名と同じ位置にあったものと推定される(北方系方言の南下により現在のように南東に押し下げられたと解釈できる――橋本 1981 の第 8 章の「河・江」の解釈も参照)．中国語方言の南北での相違は漸次的に南北間で移行する側面が強いが(橋本 1981)，この河川名の境界での南北相違が顕著であったと推定される．

次に，朝鮮語の南北線は，図示した方言境界線が該当し，やはり，朝鮮語研究でも南北二大方言の境界線と位置付けられている(韓国方言学会編 1973『国語方言学』や李崇寧 1967)．また，ほぼこの位置での南北での方言の相違は，『三国史記』における高句麗方言と新羅・百済方言における改名地名での南北相違でも一部ながら確認されており(李基文 1975，李芳漢 1983)，南北の相違としては古い可能性が指摘できる(李芳漢 1983 はアルタイ語とは別に半島部の基層言語があったと解釈しており，それが MA に関わるアジアの言語である可能性もある)．

表 4. 1　東アジア言語(日本語・中国語・朝鮮語)における「*g・k・x・h―*gw・kw・p・f・Φ」の音韻対応

	北方方言(North) *g・k・x・h	南方方言(South) *gw・kw・p・f・Φ	意味(meaning)
日本語 JPN	sukka-i kitsu	suppa-i pitsu papi(kw- ←灰)	酸っぱい(sour) 櫃(bucket made by wood) 灰(ash)
朝鮮語 KRN	xul(hor)	puri(piri)/pul(pïr)	村落(village)
中国語 CHN	xwər, xua, huo	fo, fei, pui(v-, b-, m-)	火(fire)
日本漢字音	ɦ →(漢音 k(kw-)) 絵[ɦuai]→ kwai 恵[ɦuei]→ kwei 和[ɦua]→ kwa	(呉音 w) 絵 we 恵 we 和 wa	 絵 恵 和

表 4.2　モンスーン・アジア文化圏内の言語の「火」を表す語彙
(祖語形[*pui])

日本語	[hi < pi, po < *poi <]
中国語	[huo(xuə・xua) < *xwər 上古音 < *pur <]
アイヌ語	[apé < *apui < *'pui < *pui]
朝鮮語	[pul < pïl <]
オーストロネシア語	[*apuy < *apui < *pui]

(b)　日本語南北方言の音韻とアジア方言との共通性

この 3 言語に跨る南北の境界線は，アジアでの位置的連続性と成立要因の一致から見て，複数言語に亘って共通する一続きの方言境界線と解釈される．そのことは，次のように，この境界線上で 3 言語に同一の音声現象が現れていることからも裏付けられる．興味深いことに，3 言語の南北方言には，表 4.1 に示したようなある種の音韻対応の傾向が指摘できる(安部 2007. 10)．

北方方言の喉音性(guttural)ないし破裂性(plosive)に対して，南方方言では唇音性(labial)という南北での共通性が認められる．これは，日本語方言の「酸っぱい」における「スッパイ対スカイ」の南北線での対立分布から理論的に導き出し，朝鮮語，中国語と順次見出した対応で，南北方言に音韻上の対応が現れることを示すと解釈されるものである．この対応が 3 言語に現れるのは，地理的一致から見て偶然ではない．この対応ははじめての指摘であり，どのような音声的条件で生じたかは今後の課題であるが，日本語方言研究の蓄積をもとに見つけ出せた一つの成果といえよう．「アジアの中の日本語方言を考えていく」ことの意義は，日本方言学の理論や方法を，「アジア言語の方言研究へ応用すること」でもある．それはまた，このように「アジア言語の地理的問題について，新しい解釈を見つけ出す」ことでもあろう．

ところで，この方言境界線の一致は，それが直ちに 3 言語そのものの言語学上の連続性や系統論的関連性を意味してはいない．しかし，この共通性の発見は，アジアの方言や言語形成の解決の重要な糸口となり，MA の言語研究にとって重要である．なぜなら，この発見によって例えば，別語源と考えられた中国語の「火」も同源として説明可能となり，基礎語彙「火」が MA で広く同一祖語をもつことが指摘できるからである(表 4.2)．「火」のような基礎語

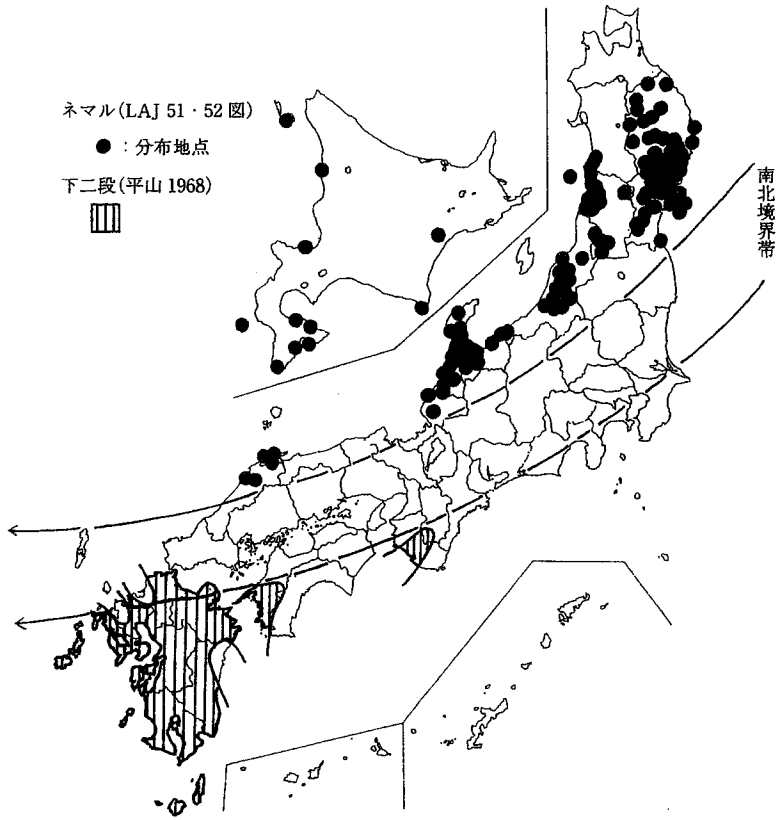


図 4.9　日本語方言の南北残存分布(アル型動詞―下二段型動詞)

中の基礎語彙が一致していることは MA での共通基礎語彙の存在を示している．

(c)　日本語南北方言の文法とアジアの地域差との類似性

南北線からは文法のアジアの中での特徴的分布も確認できる．図 4.9 は，「アル型動詞―下二段型動詞」の残存の相補分布を示す．図 4.9 の南方の範囲は有名な下二段動詞の残存地域である．下二段の残存がこの範囲にあって古態の残存しやすい東北にないことはこれまで漠然と疑問視されていた．それはむ

しろこの活用の地理的特質と関わる．偏在的残存は，東北における古態残存のように，その地域における基盤的特徴ないし長期の強固な浸透を示す．その傾向から見て，この残存分布は二段動詞の成立基盤が北方でなく南方にあったことの現れである可能性が高い．二段動詞は，周知のように四段やアリ型動詞の閉音節語幹と対照的に「開音節語幹」という特徴をもつ．この残存は開音節語幹動詞活用が北方よりもむしろ南方日本語に顕著な特徴であったことを示唆する．そして，開音節的特徴をもつオーストロネシア語がすぐ南に連なっていることを俯瞰して見るとき，二段活用とその残存地域は，実は南の言語と関わってくる特徴を示すことが明らかとなる．

これと対照的なのが，「古アリ型活用」の影響と見なせる図4.9の北方のネマルの残存領域である．ネマル(横になる・寝る他の意味)は，関東から東北で使用される方言語形として有名であるが，北方に色濃く残存する．このネマルは，オガル(生育する，大きくなる)・ウワル(植)など東北に多く残存する，語尾が現代語で「-aru」となる「アル型動詞語彙」と位置付けられる．それは上代の東国特有語として既に指摘される(福田 1972)東国方言の残存と見なせる．これらの語尾アルの語源は，動詞アリと同源の動詞化接辞アリと解釈できるものであるが[8]，この残存分布は，「古アリ型動詞」とその遡った語源である接辞アリの機能が，北方(ないし東国)で基盤的特徴ないし長期的に強固であったことの名残と解釈される．

ところでこのアリは，古代語においてさまざまな活用語で状態的機能性を派生させていく上で基礎的形態素として重要であった．例えば，助動詞のタリ

8)　アル型動詞は，接辞アリが付いたもの(古くアリ型活用と推定する)が四段動詞化したものと考えられる．「アル型動詞語彙」はネマル(安部 1999. 9)・オガルなどの共通点から万葉集に類例を探し出したもので，福田(1972)がつとに11例指摘する「ホサル(乾)・ハラル(張)・ムカル(向)」などに遡及すると位置付けられる(東北方言に多いという竹田晃子氏の教示も参考となった)．福田氏は原動詞の活用語尾のア列音に複語尾ルが付いて，「事象の過程が存在することを表している，四段活用の複語尾」と見るが，ルの来源やア段になる文法的理由は未詳である．「ア列音にリがついたような形で表す」(旧日本古典文学全集『万葉集』3351頭注)と接辞リを想定する見方もあるが(リの説明はない)，旧日本古典文学大系が挙げる ari との融合と見る解釈が妥当である．旧日本古典文学大系の例えば『万葉集』3351頭注では「降レルの訛った形．降レルという形は furiaru の ia という母音連続が ia→e という母音転化を起こして成立したものだが，ここでは ia→e という変化が起こらず，ia の i が脱落して furiaru→furaru という形になったとも見られ，また一般的に e→a があったとも見られる．」とする．

(テ完了＋アリ)，ケリ(キ＋アリ)，ナリ(ニ＋アリ)，メリ(見？＋アリ)，ザリ(ズ＋アリ)，ベカリ(ベク＋アリ)，マジカリ，リ(←アリ)，動詞のヲリ(ヰ＋アリ説)，ハベリ(ハヒ＋アリ)，形容詞カリ活用，いわゆるタリ活用・ナリ活用など多くの活用語で確認できる．これらからは古代語文法上，基礎的活用語の最も初期的生産的機能を担っていたことがわかる．そのようなアリの機能が，東国で古くはアリ型動詞として発展し(後に四段動詞化してアル型)，古態が残りやすい北方方言の特徴としてネマル・ウワル・オガルなどの方言を温存させたと解釈できる．アジアの類似の存在詞との比較は今後の課題であるが，この分布は古い段階の活用の特徴を間接的に留めた現象と解釈できる．二段動詞と対照させると，気候線南北での二つの動詞活用の残存分布もやはり，アジアの方言分布の中において検討する必要があることがわかる．

4.3節(a)項の19項目やそれ以外の日本語方言の検討も含め，アジアとの比較はこのように日本語方言の解釈にも新たな視点を提供する．次に，この南北線と方言区画論の問題(出雲方言の位置付け)を取り上げる．

(d)　アジアの中の日本語方言南北区画と出雲方言分化

中国語・朝鮮語の南北方言は，古く南北に分化した二大方言と解釈されている．大陸の河川名分布や動植物分布などはそのことを裏付ける．この2言語での南北分化が最も古い二大分化であったならば，先に一部触れたように，日本語方言も南北分化が先行し，かつ，それも相当に古い段階である可能性が高い．

中国語・朝鮮語でのこの二大方言の分化の具体的年代については資料的制約もあって定説がないが，この気候境界線の位置での文化人類学的相違の最も古いものは，旧石器時代の細石刃石器分布まで遡る(安部 2000. 3 に地図あり)．文化人類学的相違(動植物も含む)と言語的相違とは必ずしも連動するものではないので，短絡的に同列に扱うつもりはないが，少なくとも動植物の南北相違はその名称の地域的相違と直結するから，中国語・朝鮮語での史的解釈と同様，一部の語彙であれ方言の相違としては相当の古さを視野に入れる必要があることは確実である[9]．

9)　大陸・半島および列島では動植物の古くからの南北相違が指摘されているから(安部 2006. 3)，動植物語彙では南北方言として存在したと推定される．

このアジアの南北方言と対照させた解釈は，日本語「出雲方言」の位置付けに新たな解釈を提示する．気候境界線以北の北方方言は，従来の方言区画論では一つの区画として取り上げられることがなかった．しかしアジアとの対照からは新たにひとまとまりの「方言区画」をなす領域と把握できることになる．仮に「北方方言」と呼ぶが，日本語方言は初期段階で北方方言・南方方言に分化したとすると，これまで十分解釈できないでいた「出雲方言」と東北・北陸方言との連続性が説明可能となる．

従来の区画論では，出雲方言は西日本方言の中に位置付けられたが，その特徴に特に東北方言と一致するものが少なくなく，問題とされてきた(例えば，中舌音・語中の子音の有声化など)．その類似について従来いくつかの解釈が提示されていた．①東北方言と出雲方言の特徴は，基層語的特徴を留めるもので，古くは全国的に同様の特徴をもっていた(基層方言残存説)，②この2箇所の方言は，間の北陸方言も含め，同じ特徴をもっていて連続していたものであったが，後に中間部分の特徴が新たな近畿方言などの影響で失われ分断された，などである．しかし，なぜこの2箇所での方言が一致し残存するか，その南側とはどのような関係にあるか，などが必ずしも同時に説明できておらず，いわば証拠不十分で推論の域を出なかった(推論的言及は研究の初期にもあるようであるが，複数の方言分布の推移の言語地理学的解釈から出雲方言の上記のような位置付けを帰納的に述べたものでは佐藤(1986)が挙げられる)．

しかし，上記の南方・北方区画からは，出雲方言はかつて北方方言の中に位置していたことがわかり，次のように解釈できることになる．北方方言にあったものが，その間に例えば内輪方言(金田一春彦区画案)の特徴が貫入したため中間の近畿北部・北陸が西日本的方言に変わり，東日本方言と東西に分断され，現在のように，西日本方言の中で離れ小島のように東北的特徴を残す方言となった．ある程度は従来から推定されてきたこの解釈に妥当性を与えるのは，新たな南方・北方区画の提示が次の解釈を可能にするからである．①方言としての南方方言との分離(出雲方言は西にあったがゆえに，東西対立優先の先入観から西日本方言の枠組み優先で位置付けてきたが，西日本方言との地理的関連性を無理に考慮する必要がなくなった)，②北方方言としての地域的連続性の裏付け(従来は主に音韻的類似などの指摘だけであり，類似することの「地理学的要因」が説明できなかった)，③区画形成の史的古さ(中国語・朝鮮語との対比から南北方言に分化した歴史的古さが推定でき，西日本の新しい分布とは切り離して位置付けられる)，④南方・北方の同時的分化という相対的位置付け(東北的なら西日本の特徴に比べてすべて古いはずでは，と疑問視されてもいたが，南北同時分化であるから西(の周辺)に比べて単純な新旧関係のみとはならない)．

従来の出雲方言を古態と見る推定は，これらの点について説明できていなかった．アジアの南北方言という観点から，その特徴的分布の歴史的背景を新たに示し，説明し得たことになる．

南北線から事例を挙げて新たな観点を示したが，これらのように，アジアの中の方言分布の解釈は，翻って，日本語方言の史的解釈に新しい視点を提示してくれる．アジアの方言から日本語方言を再評価できることにつながる．「アジアの中の日本語方言研究」には，系統論的問題には抵触することなく，新しい言語地理学的研究の可能性が拓けている．

4.4　日本語 ABA 型方言分布とアジアとの関係

(a)　日本語方言の ABA 型分布(関東境界型)の諸相

次に ABA 型の方言分布の中でも関東から新潟にかけて境界線があるパタンを取り上げる．それは次のような分布特徴をもつ(図 4.10，安部 1997.8)．

①およそ利根川から新潟柏崎にかけて境界線が集中する(ABA での関東境界型とし，境界を関越線と総称しておく)

②境界線以北の特徴が九州以南にも見られる ABA 分布をなすものが多い(南側に分布がない AB 型も，B が拡大したためと解釈できる分布)

この ABA 型の典型的な A・B の領域は，先行研究(藤原 1962，上村 1975，佐藤 1986，井上 1990)なども含めて総合的に判断して，金田一春彦氏の方言区画案(第2次)の外輪方言地域(A)と「中輪＋内輪」方言地域(B)に相当すると解釈される(安部 1998.5.31，図 4.12 も比較参照)．この分布については，拙論で何度か取り上げており，紙幅の関係もあるので，図 4.10 の境界線と該当する方言分布については 157 ページの脚注[10]に掲載して詳しくは省略するが，

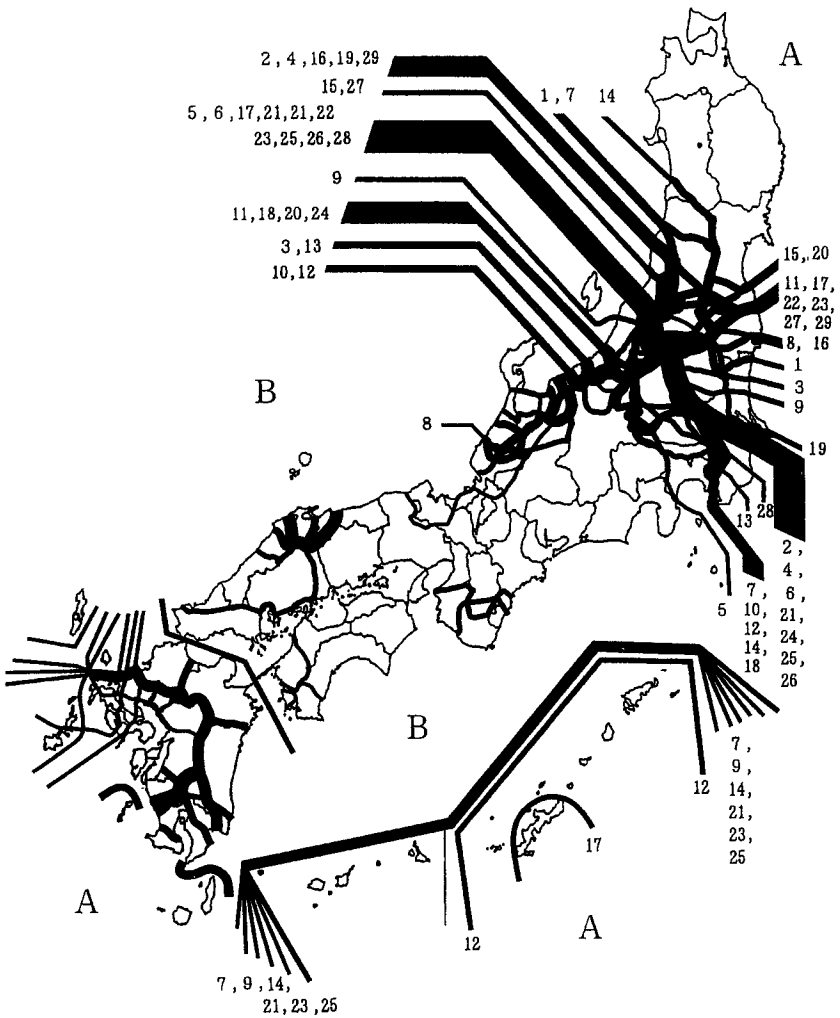


図 4.10　ABA 型分布(関東に境界線をもつ型)

図 4.10 の 27 の境界線のほか，金田一(1953)の音韻や小林(1998，2004)の文法，渋谷(1993)なども該当するので，現時点では，言語現象全般にわたる 40 項目に近い境界線が収束する分布類型となる．これは量的にも質的にも糸・浜線よりも広範に及び，現在最大の方言境界線群をなすと位置付けられる(安部 1998. 5. 31)．

(b)　ABA 型(関東型)方言の特徴と日本語の新旧比較

この南北線からは，さまざまな特徴を読み取れるが拙論で既に触れた点は省略し，アジアと関わる特徴に焦点を絞って取り上げると，次のような点が挙げられる(→にてアジアと関わる問題点を記す)．

①AB は A から B へという新旧の関係にある傾向が強い→アジア言語の影

10)　ABA 型分布に該当するのは次のものである．【以下，該当項目，A/B の語形(東北・九州以南の A/西南の B)，方言の特徴(◎：周圏的分布(九州以南)あり，★：中日本で弁別的な傾向)を示す】

《語彙》

[1]牛(LAJ 206 図)◎べー～・～べー/★ウシ，[2]目(LAJ 110 図)マナコ・マナク/メ(←ma+i)，[3]灰(LAJ 270 図)◎アク/★ハイ，[4]みずおち(LAJ 130 図)◎～オトシ/～オチ，[5]畦畔(LAJ 187 図)◎クロ/★アゼ，[6]おちる(下車するの意)(LAJ 94 図)◎下車の意味あり/★下車の意味なし(落下の意のみ)，[7]嗅ぐ(LAJ 86 図)◎カム・カマル・カビュン/★カグ，[8]糸・木綿糸(LAJ 153-157 図)カナ/★イト，[9]蜘蛛クボ・クブ/クモ，[10]コワイ(疲労の意，LAJ 44 図)◎あり/★なし，[11]コワイ(恐怖の意，LAJ 43 図)◎あり/★なし([10]と相補分布)，[12]顔(LAJ 106 図)◎ツラ/カオ，[13]酸っぱい(LAJ 41 図)スカイ/スッパイ(・スイ・スカイ)，[14]軒をかく(前部分)(LAJ 89 図)◎ハナ～/★イビキ～，[15]眉毛(LAJ 111 図)カオノケ(顔の毛)/★マユゲほか，[16]河川名における語尾「～谷」(鏡味 1958)

《文法》

[17]助詞「主格ガ」の省略(LAJ 98 図)◎省略/省略されない→無助詞/★格機能の弁別，[18]条件法「～書けば」(GAJ 128 図)◎カケバ/カキャー，[19]敬語(加藤 1977)無敬語方言・身内敬語のない方言/★多くは身内敬語のある方言，[20]形容詞の「無活用化」(GAJ 136-144 図)◎いわゆる「無活用」/★活用完備

《音韻》(該当項目は，その音韻特徴として相互に関連するものがある)

[21]中舌母音(SDJD)◎あり/★なし[i][u]の弁別，[22]シとスの区別(加藤 1975)なし(/si/ないし/su/に統合)/★あり[i][u]の弁別，[23]四つ仮名(SDJD)◎一つ仮名/★二・三・四つ仮名[i][u]の弁別，[24]母音イとエの区別(加藤 1986)なし([e]に統合)/★あり[i][e]弁別，[25]有声化(非語頭カ行子音)(SDJD)◎有声化/★無声音と有声音を弁別，[26]有声化(非語頭タ行子音)(加藤 1975)有声化/★無声音と有声音を弁別，[27]入り渡り鼻音(ザ，ダ，バ行)(SDJD)◎あり/なし→関連：有声化，[28]ガ行子音[g][ŋ]の区別(なし〈内部あり〉/★あり)，[29]動詞重複形(連用形重複形)(あり/なし)，[30]特殊拍(撥音・促音・長音)の 1 拍扱い(なし/★あり)，[31]動詞語尾の音韻の減少(なし/あり)(金田一 1953)．小林(1998，2004)の文法項目のいくつかも該当し，現在 40 項目に近い境界線が収束する(安部 1998. 5. 31)．

響の新旧比較

②ABの地理的分布の形成は関東の地形的な要因(奥東京湾)にあり，少なくとも縄文中期に遡る可能性が高い→従来の縄文—弥生という構図はすべて再考が必要で，アジア言語の影響の時期も再検討を要する

③ABでの相違は他の境界線より多く，かつ，音韻・語彙・文法全般の言語構造に及び変化が大きい(言語全体に影響した要因による)→変化の歴史的背景とその規模の問題(内的変化とアジア言語など外的要因の有無)

④ABでの全体的相違に共通して一定の変化の方向が認められる(機能的相違＝「弁別性・分析性⇔総合性」，糸・浜線が特に「母音性—子音性」(馬瀬 1992，柳田 1993，安部 1999. 5)といわれる音韻的傾向に偏るのとは異なる→アジア言語との関係や影響の質的問題

⑤ABでの相違は，断続的で，語彙では文化的変化が，ある一定期間に偏る傾向も認められる→周辺アジア文化の受容と影響(近代の外来文化の影響に比較される)

(そのほか，⑥Bの領域が後代東西両方向へ拡大している傾向，もある.)

③④からは，糸・浜線や南北線など他のパタンに比して，この分布形成では，Bが言語構造全体に影響が及ぶような一定の要因による変化であることを示唆する．また，①③④は糸・浜線の東西(AB)の傾向とは異なるもので，比較的一定期間で，方向性をもつ史的断続的変化を示唆する．また，糸・浜線でのAB形成時期の新旧は長期に亘っていて多様であるが，⑤の語彙にはBの語形が特に弥生時代以降の特徴を示す次のような事例がある．

[1]ウシ(飼育牛)の拡大時期との関係→渡来系の飼育牛の化石が確認される時期は弥生中期以降

[3]ハイ(ハヒ)の語源と限定的使用法の拡大→漢字語「灰」(橋本 1978，安部 1997. 8)，染色技術など特定目的による受容か？

[5]アゼの意味が田の境界に限定される傾向→稲作の伝播拡大時期以降

[8]イトの語源と絹織物の受容時期→朝鮮語(絹糸)sil(亀井 1954)の語源説，及び，絹織物の発掘は弥生以降

この特徴と要因の一つである「奥東京湾」の形成時期(縄文中期)からは，Bの領域の語彙では，古くは縄文中期以降，特に弥生時代以降に地域的特徴をもつようになったと解釈できる．また，この4項目はいずれも外来文化の受容として理解できる点でも共通する．それらの特徴は，Bの領域における考古学・人類学・民俗学・動物遺伝学・地名などにおける現象とその成立時期とも一致する(安部 1998. 3)．簡略にいえば，Aの特徴は縄文(中期)以前の日本語が投影され，Bは何らかの外来文化受容を伴う，新しい段階での言語特徴を残存させている可能性が高いことになる．AB方言に日本語の歴史的前後関係が残存しているなら，その新旧の観点からアジアの方言と比較することが可能となる．その事例を次に取り上げてみたい．

(c)　アジアの中の「糸」の方言「カナ—ソ—イト」

ABA型分布のアジアの言語との比較例として「糸」を取り上げてみる．「糸」を表す方言にはカナ・イト・ソがある(LAJ 153図「糸」，156図「木綿糸」，また155図「絹糸」，157図「機糸(はたいと)」，図4. 11)．この3語形は，ある段階において，利根川付近を境界としてAカナ・ソ(ソはカナより内側で新しく南北線より南)，Bイトという ABA分布をなし(図4. 11では略されているが，157図ではカナが沖縄，ソが宮崎にも分布し，南側のAをなす)，また，カナ—ソ—イトの順に三重に歴史的に重なってできていると解釈できる．その語源と分布は，アジアの方言と比較すると，そのまま日本列島での方言の重なり(の一部)を象徴している．

この3語形の語源は，各々異なる言語が指摘できる．イトは，亀井(1954)が朝鮮語(絹糸)と同源とされた．ソは，中国語「苧(苧麻)」(気候線の南方の麻)と同源であろう(安部 2002. 5)．カナは近い言語を挙げればアイヌ語のka，kaa，kanと同源の蓋然性が高いが(*kan)，服部(1964)は千島アイヌ語方言千島[ōka]に対して「チュルク語」okaを注記している(<*ʔkan)．それだけでなく，安部の調査によれば，朝鮮語では紐の意味で『朝鮮語辞典』に「[ʔkɯn] 1 ひも，緒(お).」がある(アイヌ語でも紐にkaが使われる)．これらの祖形を*kanと推定すると，中国語の「糸」「縦糸」「弦」の意味の漢字には多くk・gで始まる語形が極めて特徴的であるから(「経・絹・緘・繭・綸・絃・弦」)，それらも同源となる蓋然性が高い．さらに上述の南北のk—pの対応とMAという背景からはオーストロネシア語で*panでの存在が導き出せるが，その理

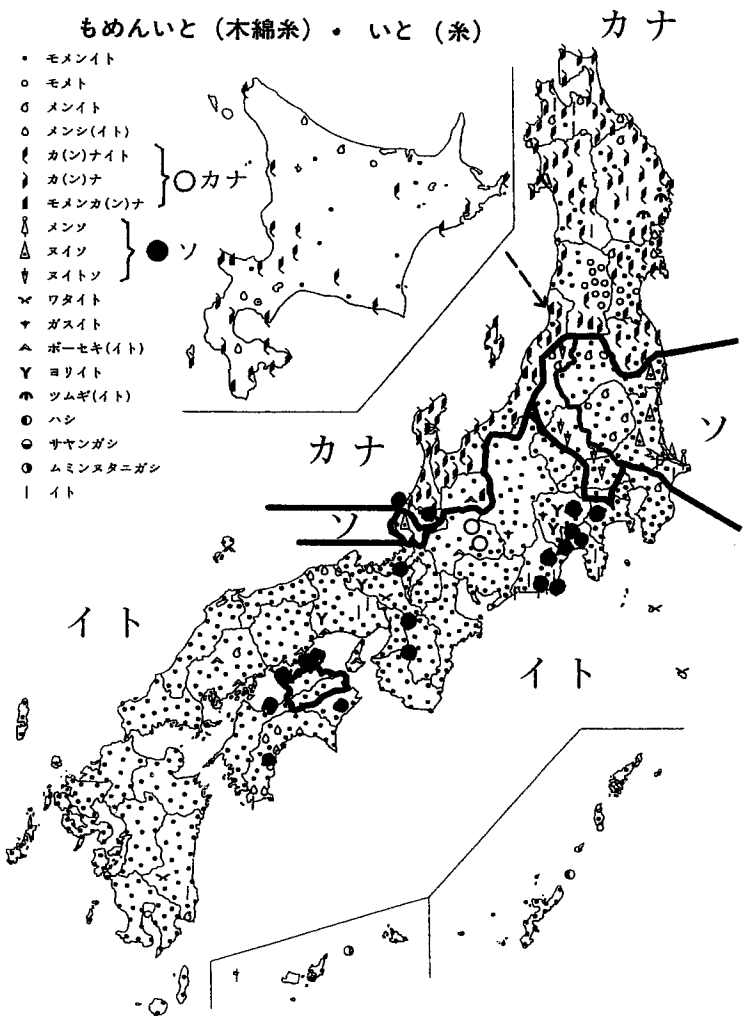


図 4. 11 「糸」の言語地図——LAJ 153 図「糸」・156 図「木綿糸」より（北からカナ・ソ・イト）(『日本方言大辞典』SDJD の「木綿糸」による)

論的推定通りにヘスペロネシア語祖語形として，同源(*pan>*ban>*bana)と見なせる[*běnáŋ]が確認できる(Tryon 1995: 06. 380 THREAD)．一方，崎山(2001. 12)は，それとは別に中古日本語「へ(乙類・綜)」を「*縦糸(緯)」と見，

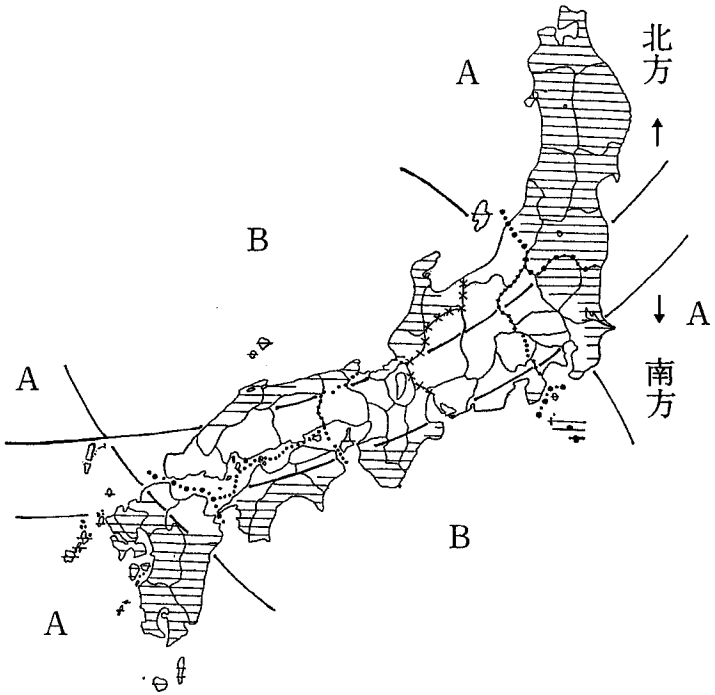


図 4. 12 日本語表現における新旧の ABA 分布(藤原 1962 の「古系脈」の残存(横線)に境界線を安部加筆)

「古代日本語 *paa>*pa—i」を西マライポリネシア語の「*pakan 緯糸」に遡る同源と見ており，そこでもオーストロネシア語と関わる *pa～が指摘されているのを見出すことができるから，安部の推定祖形 *pan は日本語ではカナのほか，この「へ(綜)」にも現れている可能性があることになる(*pan>*pa+形状言接辞 i)．要するに，カナは糸状の道具を表す語形としては，アジア・環太平洋の言語全体と比較する必要があることがわかる．

カナは日本列島全体に分布するが(安部 2002. 5)，その同源語系は MA に広く分布しており，ソは中国でも日本でも南北線より南に分布していて日本では絹よりも古い植物・布織物(オンゾ「御衣」参照)として受容されている．イトの古い分布はソより南の関越線以南で新しいものであるが，イトの原義が絹と

するなら絹の繊維としての渡来は考古学からも弥生時代以降であることが明らかにされている．これらからは，カナーソーイトという史的段階があり，その分布は，重要な類型的分布パタンとも関わる分布をなしていることがわかる．そのことは，この3語の分布や類型的分布パタンが，アジアの方言との一定の史的影響関係も象徴していることを示すと解釈できるであろう．

かつて藤原(1962)は，独自の調査と視点から，このABA型分布の地域にほぼ相当する図4.12を示し，周辺(横線部)が古い特徴をもつ日本語であることを既に早い段階で指摘していた．LAJなど検証できる資料が十分でない時代であったため従来あまり注目されなかったが，このABの新旧や南北方言の問題として改めて検証していく必要がある指摘と思われる．そのABの新旧方言を，太平洋を含むMAの中で検討することは，朝鮮語・アイヌ語に縛られない新たな研究を可能とするであろう．

4.5　おわりに

本章では，「アジアの中の日本語方言」というテーマのもと，前半は，主にこのテーマでの理論的課題を取り上げた．後半では，アジアの中で取り上げる上で，優先的に考えていくべき分布パタンの問題を一部ながら具体的に紹介した．次の段階としては，後半で紹介した他の個々の方言を，アジアの言語・方言と対照させて検討していく必要がある．

本章では具体例の数よりも，理論的問題や比較の観点を優先した．それは，一つには，個々の分布現象の解釈には，一つの方言事例でも多くの紙幅を必要とすることもあり(「酸っぱい」の解釈(安部2007.3b)，河川名の問題(安部2007.3c)など参照)，1,2の例よりもさまざまな解釈の可能性を示しておくことの方が，今後の研究に有効であると考えたからでもあった．

また，これまでは指摘されていなかった分布現象も新たに提示した．それらの分布が今後の研究に有効であるとするなら，それらの分布を見出せたのは，本章で取り上げた多角的視点から日本語とアジアの方言を見直したからである．また，理論的視点が新たな方言分布の課題を見出したということができよう．4.3節で挙げた他の分布パタンなど触れ残した問題も少なくないが，それらは，

具体的現象の解釈とともに機会を改めたい．

参考文献

(http://www.geocities.jp/abeseiya2005/も参照)
安部清哉(1989.3)「『日本言語地図』三辺境分布・東西辺境分布＝語形図集」『フェリス女学院大学紀要』24
安部清哉(1991)「三辺境分布」佐藤亮一監修『方言の読本』小学館，p.9
安部清哉(1997.3)「『日本言語地図』偏在分布＝語形地図集—西日本分布・東西対立分布・三地域鼎立分布—」『フェリス女学院大学文学部紀要』32
安部清哉(1997.7)「古代日本語の動詞重複形(reduplication)二種の語法と方言分布及びその言語類型地理論的問題」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院
安部清哉(1997.8)「もう一つの東西対立境界線“関東・越後線群”—『外日本＝中日本対立分布』＝地図集—」『玉藻』33
安部清哉(1998.3)「日本列島上の歴史と文化におけるもう一つの東西対立境界線“関東・越後線群”—『広日本—中日本対立分布』＝地図集—(人類学・考古学・民俗学篇)」『フェリス女学院大学文学部紀要』33
安部清哉(1998.5.31)「言語地理学から見た方言境界線“関東・越後線”と方言区画論」国語学会平成10年度春季大会要旨集
安部清哉(1999.5)「東西方言の諸相と日本語史の課題」『日本語学』18-5
安部清哉(1999.9)「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”」『玉藻』35
安部清哉(2000.1)「方言分布と日本語史」『国文学解釈と鑑賞』824
安部清哉(2000.3)「既発表拙論の補足説明と誤植訂正」(安部清哉・工藤香寿美(2000.3)「秋田方言研究のための語彙表台帳」に付載)『フェリス女学院大学文学部紀要』35
安部清哉(2000.12)「比較語彙研究の諸相と広がり」田島毓堂編『比較語彙研究の試み6—国際シンポジウム比較語彙研究II—』
安部清哉(2001.8)「東アジア(日本語・韓国語・中国語)の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」韓國日本學會(KAJA)第63回學術大會Proceedings
安部清哉(2001.11)「東アジア(日本語・韓国語・中国語)の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関　配布地図・補説」『玉藻』37
安部清哉(2002.5)「方言地理学から見た日本語の成立—第3の言語史モデル理論としての“Stratification Model”—」佐藤亮一・小林隆・大西拓一郎編『方言地理学の課題』明治書院
安部清哉(2003.3)『日本語の方言分布境界線(関越線・気候線)による方言の重層性に関

する基礎的研究』平成13-14年度科学研究費(基盤研究(C)(2))成果報告書
安部清哉(2003. 5)「記述と仮設と実証と理論との相互作用的発展―主に語彙史研究の視点から―」国語学会2003年度春季大会予稿集
安部清哉(2003. 7)「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」『国語学』54-3
安部清哉(2004. 7)「地名と日本語―河川地形名の言語空間―」『国文学解釈と鑑賞』69-7
あべせいや(2004. 12)「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」『日本語学』23-15
安部清哉(2005. 5)「日本語・朝鮮語の境界とモンスーン・アジアという世界―水源地形名 numa<*nub(沼・泥)の「m―b」音韻対応―」大韓日語日文学会『日語日文学』26
安部清哉(2005. 6. 11)講演「モンスーン・アジア文化圏の中の東北アジアの位置」韓国・東北アジア文化学会編『断絶と交流の東アジア，その21世紀的展望』東北アジア文化学会第10回国際学術大会要旨集(学習院大学)，pp. 3-9
安部清哉(2006. 3)「アジアと日本列島における言語・文化境界線"気候線"(摂氏0度線)―言語地理学と文化地理学から―」『学習院大学文学部研究年報』52
安部清哉(2007. 3a)『言語成層論モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的研究』平成15-17年度科学研究費(基盤研究(C))成果報告書
安部清哉(2007. 3b)「味覚形容詞語彙の歴史と日本語基礎形容詞語彙の類型的構造―スシ・スカシの語源の再検討から―」金水敏編『日本語史の理論的・実証的基盤の再構築』平成16-18年度科学研究費(基盤研究(B))成果報告書
安部清哉(2007. 3c)「日本語方言の形成過程における河川名の基層」小林隆編(2007)『日本語方言形成モデルの構築に関する研究』平成15-18年度科学研究費(基盤研究(B))成果報告書
安部清哉(2007. 3d)「日本語方言における『呼気』の測定と地域差に関する記述的研究(共同研究プロジェクト概要)」学習院大学人文科学研究所『学習院大学人文科学研究所報2006年度版』pp. 27-36
安部清哉(2007. 10)「中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」(k・x―p)」王鉄橋・姚灯鎮主編『国際化視野中的日本学研究―紀念胡振平教授従教45周年―』(東アジア日本学研究国際シンポジウム論文集)，天津・南開大学出版社
井上史雄(1977)「方言の分布と変遷」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語11　方言』岩波書店

井上史雄(1990)「標準語形の計量的性格と地理的分布パタン」『言語研究』97
上村幸雄(1975)「日本語の方言，共通語，標準語」大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語―日本語方言学概説―』筑摩書房
上野善道編(1989)「音韻総覧」小学館国語辞典編集部編『日本方言大辞典』小学館
大西拓一郎(1997)「活用の整合化」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院
大野晋(2000)『日本語の形成』岩波書店
大林太良(1999)『銀河の道 虹の架け橋』小学館
小川環樹(1981)「蘇州方言的指示代名詞」『方言』一九八一年第四期(方言編輯部)北京・中国社会科学出版社，pp. 282-288
鏡味明克(1984)『地名学入門』大修館書店
鏡味明克(1985)『地名が語る日本語』南雲堂
鏡味完二(1958)『日本地名学　地図篇・科学篇』東洋書林原書房
加藤正信(1975)「方言の音声とアクセント」大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語―日本方言学概説―』筑摩書房
加藤正信(1977)「方言区画論」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語11　方言』岩波書店
加藤正信(1986)「音韻概説」飯豊毅一他編『講座方言学1　方言概説』国書刊行会
加藤正信(1989)「日本語(III-6 現代日本語　方言)」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典2』三省堂
亀井孝(1954)「『ツル』と『イト』」『国語学』16
韓国方言学会編(崔鶴根・著者代表)(1973)『国語方言学』蛍雪出版社(韓国)
金田一春彦(1953)「音韻」東条操編『日本方言学』吉川弘文館
金田一春彦(1964)「私の方言区画」東条操監修・日本方言学会編『日本の方言区画』東京堂
小泉保(1998)『縄文語の発見』青土社
国立国語研究所編(1966-75)『日本言語地図』(The Linguistics Atlas of Japan, LAJ)第1集-第6集，大蔵省印刷局
国立国語研究所編(1989-2006)『方言文法全国地図』(The Grammar Atlas of Japanese Dialects, GAJ)第1集-第6集，大蔵省印刷局/財務省印刷局/国立印刷局
小林隆(1998)「文法から見た東日本方言の形成」『言語』27-7
小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
小林隆編(2007)『日本語方言形成モデルの構築に関する研究』平成15-18年度科学研究費(基盤研究(B))成果報告書
崎山理(1990)『日本語の形成』三省堂

崎山理(2001. 12)「(フォーラム)オーストロネシア語族と日本語」『言語研究』120
桜井茂治(1975)『古代国語アクセント史論考』桜楓社
迫野虔徳(1998)『文献方言史研究』清文堂
佐藤亮一(1986)「方言の語彙—全国分布の類型とその成因—」飯豊毅一他編『講座方言学1　方言概説』国書刊行会
真田信治(1989)『日本語のバリエーション』アルク社
柴田武(1962)「単語の全国分布」『人類科学』15, 新生社
渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1
新村出(1916)「国語および朝鮮語の数詞について(承前)」『芸文』7-4
竹内和夫(2001)「日本語系統論・類型論とアルタイ語学」『国文学解釈と鑑賞』66-1
東条操(1953)『日本方言学』吉川弘文館
東条操監修・日本方言学会編(1964)『日本の方言区画』東京堂
徳川宗賢(1981)『日本語の世界8　言葉・西と東』中央公論社
徳川宗賢(1993)『言語地理学の展望』ひつじ書房
西光義弘・水口志乃扶(2004)『類別詞の対照』くろしお出版
橋本萬太郎(1978)『言語類型地理論』弘文堂
橋本萬太郎(1981)『現代博言学』大修館書店
服部四郎(1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店
早田輝洋(1987)「アクセント分布に見る日本語の古層」『言語』16-7
早田輝洋(1992)「中国大陸における単語声調言語：上海語とチベット語」『九州大学言語学研究室報告』13
早田輝洋(1994)「日本語と日本語周辺諸言語の音調システム—特に複合名詞におけるアクセントと音調について—」『音声の研究』23
平山輝男(1968)『方言学』講談社現代新書
福田良輔(1972)「東国方言の国語史的意義」『万葉集[II]—言語と歌論—』(大東急記念文庫文化講座講演録), 大東急記念文庫
藤原与一(1962)『方言学』三省堂
馬瀬良雄(1992)『言語地理学研究』桜楓社
松下大三郎(1927)『標準漢文法』紀元社
松本克己(2006)『世界言語への視座—歴史言語学と言語類型論—』三省堂
馬淵和夫(1999)『古代日本語の姿』武蔵野書院
柳田征司(1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
李基文(1975)『韓国語の歴史』大修館書店
李芳漢(1983)『韓国語の系統』三一書房

李崇寧(1967)「韓国方言史」高麗大学校民族文化研究所『韓国文化史大系9　言語・文学史(上)』高麗大学校民族文化研究所出版部
ルーウィン, R.(2002)(Lewin, Roger)『人類の起源と進化』保志宏・植崎修一郎訳, てらぺいあ
Abe, Seiya (2003. 7) Dialectical/climatic features and distribution of terms for water-courses in Asian languages: the case of Japanese, Korean, and Chinese. *Proceedings of XVII International Congress of Linguists* (CD-ROM, Prague, July 24-29th, 2003). CIL, p. 83
Abe, Seiya (2006) On the "Monsoon Asia Substratum" and Altaic Superstratum in East Asia: A Stratificational Approach to Geolinguistics. In Guido Oebel (ed.), *Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache: Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblate* (The Festschrift for Doc. Wolfgang Viereck). LINCOM, pp. 79-96
Aikhenvald, Alexandra Y. (2000), *Classifiers*, Oxford University Press.
Frobenius, Leo (1929) *Erlebte Erdteile, Bd. VII: Monumenta Terrarum: Der Geistüber den Erdteilen*. Frankfurter Societäts-Druckerei
Frobenius, Leo (1938) Das Archiv für Folkloristik. *Paideuma vol. 1*. Johnson Reprint Company Ltd.
Matisoff, James A. (1973) Tonogenesis in Southeast Asia. In Larry M. Hyman (ed.), *Consonant Types and Tone*. Southern California Occasional Papers in Linguistic 1, University of Southern California, pp. 73-95
Matisoff James A. (1998) Tibeto-Burman Tonology in an Areal Context. *Cross-linguistics Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Typology, and Related Topics*. ILCAA, Tokyo Univ. of Foreign Studies, Dec. 10-12, 1998, pp. 3-32
Tryon, Darrell T. (ed.) (1995) *Comparative Austronesian Dictionary: An Introduction to Austronesian Studies*. Mouton de Gruyter